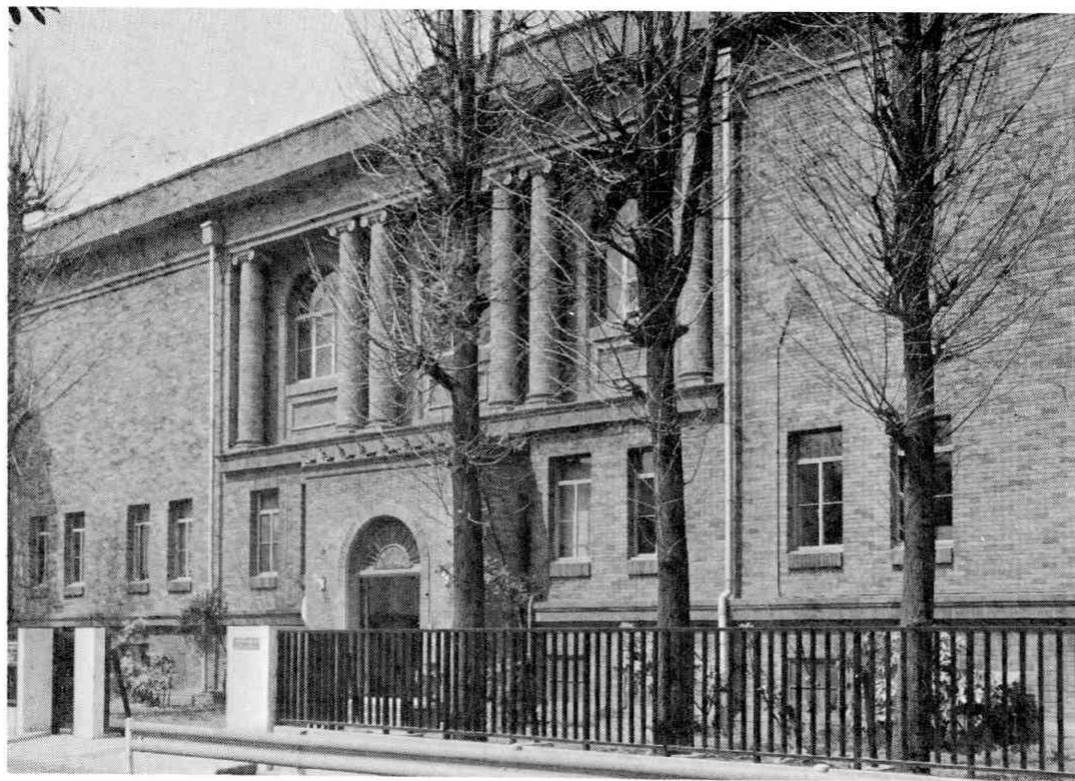


東京国立文化財研究所要覧

1 9 7 3

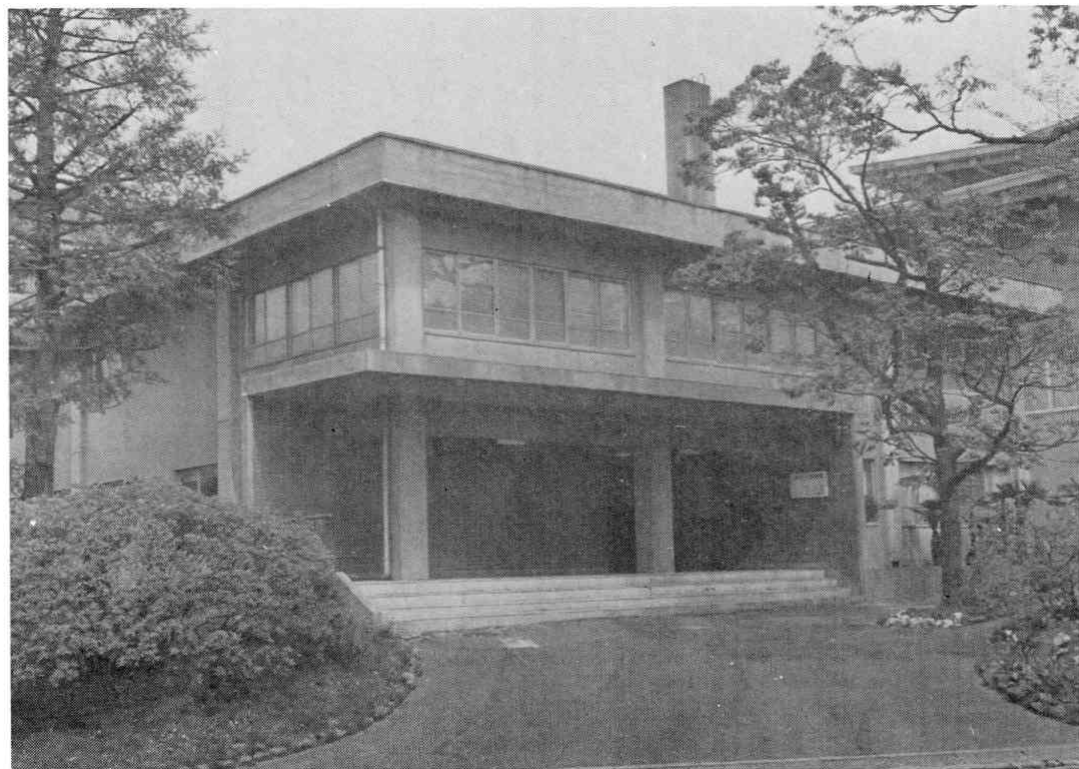
昭和48年度



美術部庁舎

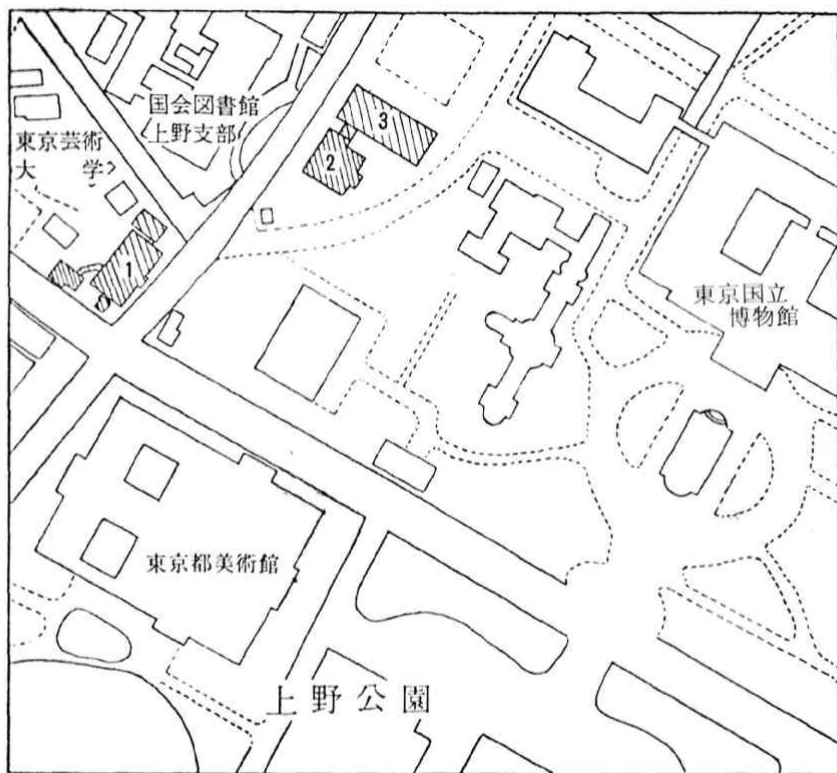


芸能部・保存科学部・修復技術部庁舎



庶務課・保存科学部庁舎

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 美術部庁舎
2. 庶務課・保存科学部庁舎
3. 芸能部・保存科学部・修復技術部庁舎

目 次

I	沿 革	1
1	設 立 の 経 緯	1
2	年 表	1
3	歴 代 所 長	5
II	設立目的と機構	6
1	機 構	6
2	職種別予算定員	7
III	土地・建物	8
1	建物の面積・構造一覧	8
2	建物の平面図	9
IV	予 算	13
1	歳 出 予 算	13
2	科学研究費補助金交付決定額	13
V	研究活動及び事業	14
1	研 究 活 動	14
(1)	美 術 部	14
A	研究・調査活動の概要	15
B	研究 題 目	15
C	研究・調査活動	16
D	主要研究業績	27
E	科学研究費題目	32

(2) 芸 能 部	32
A 研究・調査活動の概要	32
B 研究 題 目	33
C 研究・調査活動	35
D 主要研究業績	38
E 科学研究費題目	40
(3) 保存科学部	40
A 研究・調査活動の概要	41
B 研究 題 目	41
C 研究・調査活動	44
D 主要研究業績	47
E 科学研究費題目	50
F 受 託 研 究	50
(4) 修復技術部	51
A 研究・調査活動の概要	52
B 研究 題 目	52
C 研究・調査活動	54
D 主要研究業績	57
E 科学研究費題目	59
F 受 託 研 究	59
2 事 業	61
(1) 出 版	61
A 美 術 研 究	61
B 日本美術年鑑	62
C 芸能の科学	62
D 保 存 科 学	62
E その他の出版物	64
(2) 公開学術講座	67
(3) 開所記念日行事	68

(4) 国際国内関係	70
VI 研究施設・設備	73
1 蔵書	73
2 資料	73
3 機器・設備	74
4 黒田記念室	78
5 閲覧室	79
VII 職員	80
1 現職員	80
2 旧職員	82
VIII 関係法規	85

I 沿革

1 設立の経緯

本研究所は、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母胎となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出損した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行なうべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏗二郎および東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、またわが国美術上の必要に照らして次の事業を行なうこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうえは一切これを政府に寄附すること。

2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二および大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した。

同3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・

写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同年10月17日 美術研究所開所式を挙行了した。

同7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ヶ年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行なうことになった。

同9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同年4月 「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平家建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、ならびに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同年7月～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品ならびに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸術部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

同年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室は、国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来、東京国立博物館地階の1室に置かれていたが、同館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号）、東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号）、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663㎡の建物1棟が竣工した。

同年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号）、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴ない、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号）、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1950.41㎡）の起工式が行なわれた。

同45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行なわれた。

同45年4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。

同45年5月8日 保存科学部は、別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。

（本館は、美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」と変更された。

同46年4月1日 保存科学部庁舎および別館の敷地2,658㎡を東京国立博物館から所属換された。

同48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され（昭和28年1月13日文部省令第2号）新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれた。ただし保存科学部の修理技術研究室は廃止された。

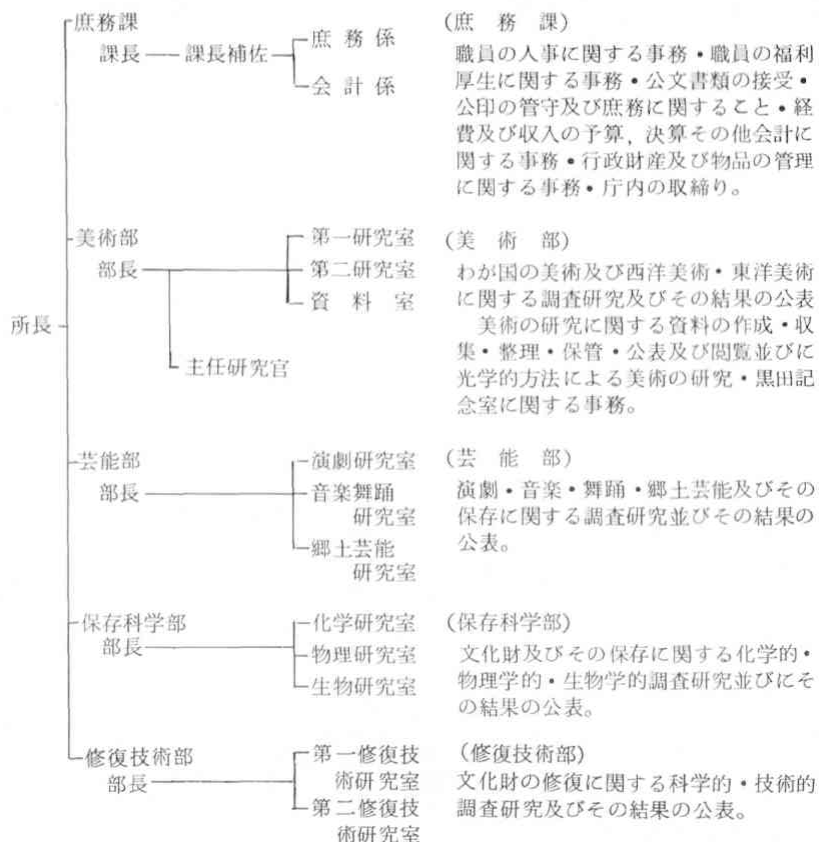
3 歴代所長（昭和5年～昭和48年）

主 事	正 木 直 彦	（昭和 5. 6. 28 - 昭和 6. 11. 25）
主 事	矢 代 幸 雄	（昭和 6. 11. 25 - 昭和10. 6. 1）
所長事務取扱	和 田 英 作	（昭和10. 6. 1 - 昭和11. 6. 22）
所 長	矢 代 幸 雄	（昭和11. 6. 22 - 昭和17. 6. 29）
所長事務取扱	田 中 豊 藏	（昭和17. 6. 29 - 昭和22. 8. 16）
所 長	田 中 豊 藏	（昭和22. 8. 16 - 昭和23. 5. 11）
所長代理	福 山 敏 男	（昭和23. 5. 11 - 昭和24. 8. 31）
所 長	松 本 栄 一	（昭和24. 8. 31 - 昭和27. 4. 1）
所長事務代理	矢 代 幸 雄	（昭和27. 4. 1 - 昭和28. 11. 1）
所 長	田 中 一 松	（昭和28. 11. 1 - 昭和40. 4. 1）
所 長	関 野 克	（昭和40. 4. 1 - 現 在 ）

Ⅱ 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なうことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1 機 構



2 職種別予算定員

区 分	47 年 度	48 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職 (一)	13	13
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	3	3
主 任	1	1
一 般 職 員	5	5
行 政 職 (二)	1	0
技能・労務職員	1	0
研 究 職	31	34
部長等研究員	9	10
室長等研究員	9	12
研 究 員	13	12
合 計	46	48

Ⅲ 土地・建物

本研究の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室および別館である。

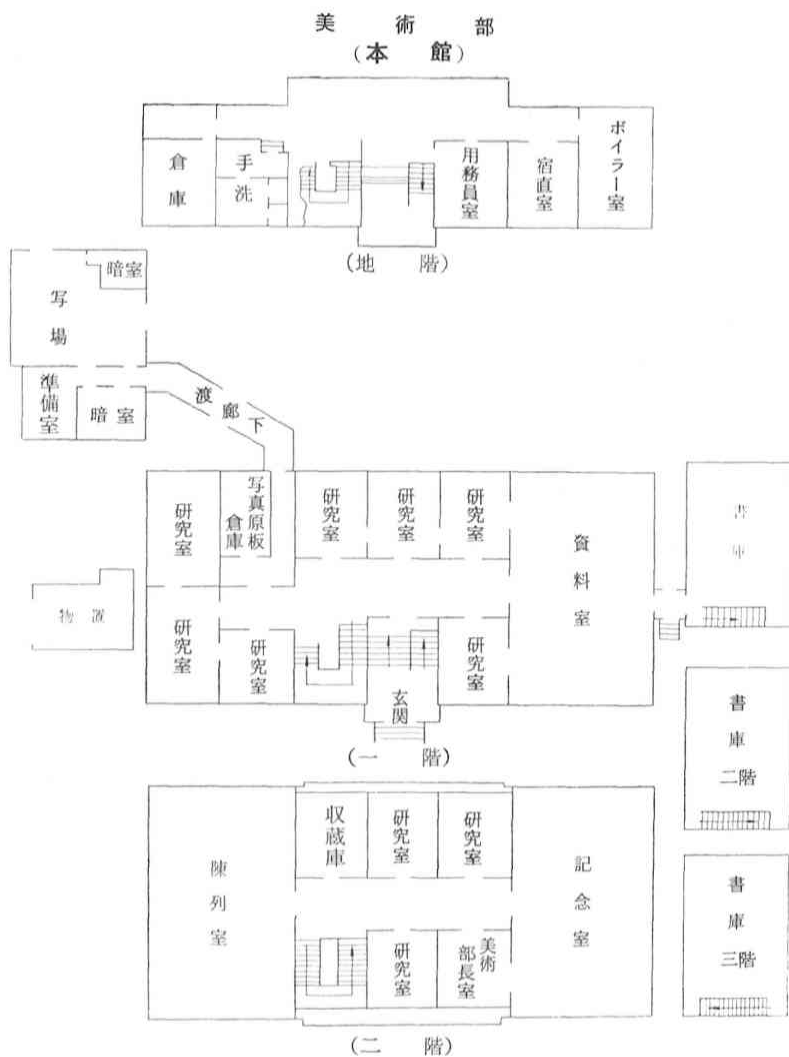
土地は、本館の敷地 1,457 m² 保存科学部実験室および別館の敷地 2,658 m² の計 4,115 m² である。

なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

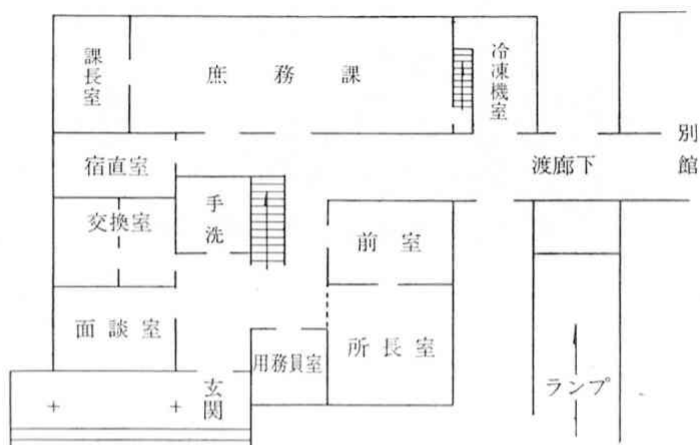
1 建物の面積・構造一覧

No	名 称	種目・ 構造	建面積 延面積	建 築 年 月 日	No	名 称	種目・ 構造	建面積 延面積	建 築 年 月 日
1	本 館	事務所建 RC.地上 2階・地下 1階	$\frac{468.26}{1,192.72}$ m ²	昭 3. 8. 30	6	渡 廊 下 (写場)	雑 屋 建 木造平家	$\frac{20.26}{20.26}$ m ²	昭 13. 3. 25
2	書 庫	倉 庫 建 RC. 3 階	$\frac{64.63}{201.80}$	" 10. 1. 25 (32. 11. 30) (3階増築)	7	車 庫 (現物置)	"	$\frac{27.96}{27.96}$	" 15. 9. 11
3	渡廊下 (書庫)	雑 屋 建 RC. 平家	$\frac{4.90}{4.90}$	" 10. 1. 25	8	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2 階	$\frac{338.44}{684.91}$	" 37. 3. 28
4	写 場 及 第 1 暗室	雑 屋 建 木造平屋	$\frac{62.80}{62.80}$	" 13. 1. 8	9	別 館	事務所建 RC. 地下 1階地上3 階塔屋付	$\frac{462.75}{1,950.41}$	" 45. 3. 25
5	準備室及 第 2 暗室	"	$\frac{35.12}{35.12}$	"	10	渡 廊 下 (別館)	雑 屋 建 鉄 骨 造 平 家	$\frac{27.60}{27.60}$	"

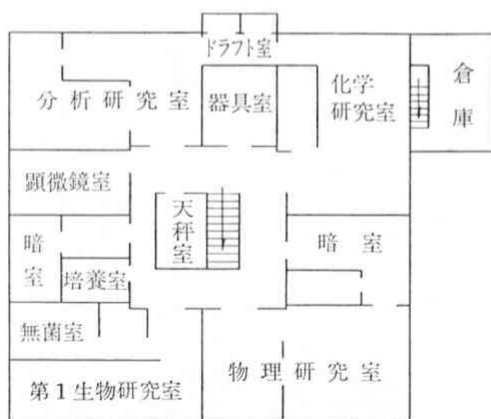
2 建物の平面図 (各庁舎の縮尺不同)



庶務課・保存科学部（実験室）



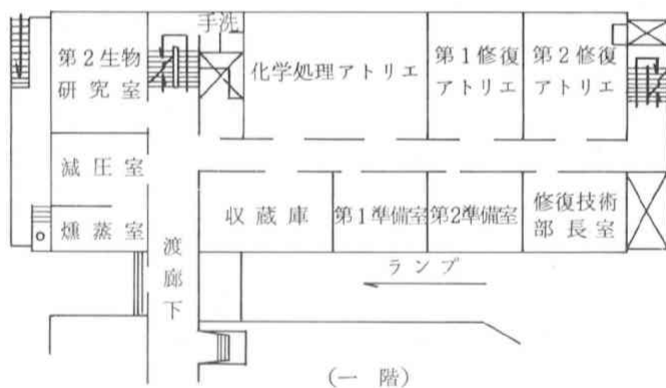
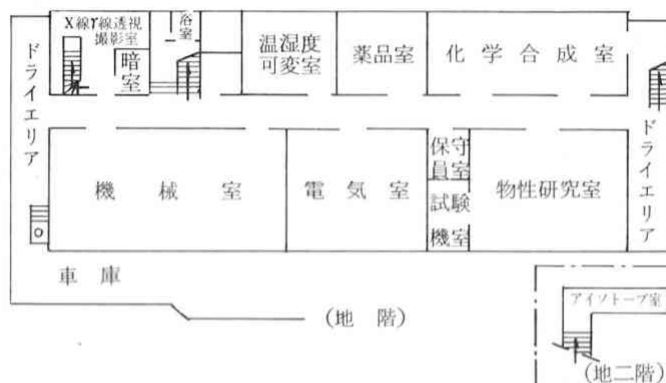
(一 階)

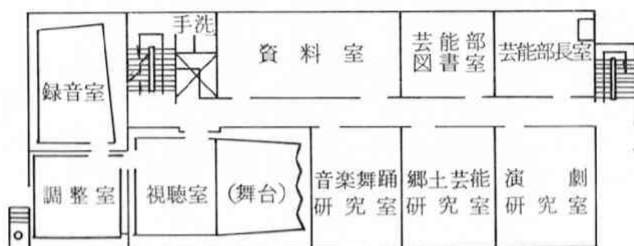


(二 階)

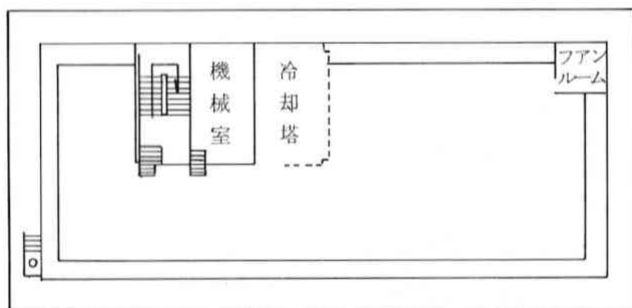
Ⅲ 土 地 ・ 建 物

芸能部・保在科学部・修復技術部
(別 館)





(三 階)



(屋 上)

IV 予 算

1. 予算（当初）

（単位千円）

区 分	人 件 費	事 業 費	施設整備費	合 計
昭和47年度	93,966	52,741	4,295	151,002
昭和48年度	103,150	57,760	0	160,910

2. 科学研究費補助金交付決定額

（単位千円）

区 分	一般研究		奨励研究		総合研究		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭和47年度	2	1,200	—	—	—	—	2	1,200
昭和48年度	5	4,530	2	340	1	1,500	8	6,370

昭和48年度内訳

研 究 題 目	研 究 者	金 額	摘 要
法華経絵の研究	宮 次 男	1,800 千円	一般研究 B
薩摩坊ノ津を中心とした民俗 芸能の研究	三 隅 治 雄	530	一般研究 C
中央アジア絵画における東方 要素とその浸透についての検討	上 野 ア キ	1,000	一般研究 C
廃寺永久寺真言堂伝来の絵画 遺品に関する調査研究	柳 沢 孝	1,000	一般研究 C
油絵の保存に関する科学的研 究	見 城 敏 子	200	一般研究 D
長野県における獅子舞と若者 組に関する研究	中 村 茂 子	110	奨励研究 A
狩野探幽の研究	河 野 元 昭	230	奨励研究 A
院政前期より後期への様式展 開に関する研究	猪 川 和 子	1,500	総合研究 A

V 研究活動及び事業

1 研究活動

(1) 美術部

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行ない、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料を作成、収集、整理し、これらの資料を一般研究者の利用にも供し、美術史学研究における資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ、古美術関係は第一研究室、近代・現代・西洋美術は第二研究室、資料関係は資料室が担当する。

調査研究は美術部3室所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果して、広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行ない、また当部独自の光学的研究法を活用し、すでに多くの成果を収めている。

これらの業績は当部の機関誌「美術研究」（昭和7年創刊、年6冊発行）に発表し、大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行している。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼とした「日本美術年鑑」を編纂発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては、当部の前身たる美術研究所として発足以来調査研究とともに力をそそいで来たが、毎年増大する資料の蓄積は、文化財関係事業等のためのみならず、部外研究者や、広く海外の研究者のためにも大きな寄与を果している。また「日本美術年鑑」には、毎年日本・東洋古美術ならびに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文および単行図書を分類集録した文献目録を編纂し、美術史学界をはじめ関連ある学界に著しく貢献している。なお古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加え一定の年次をまとめて既に数冊刊行したが、今後これが継承に努めたい。

以上のほか、調査研究成果の一部を広く一般の理解に資するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

V 研究活動及び事業

黒田清輝の遺産と遺作の寄附に基いて創立された、美術部（旧美術研究所）の黒田記念室は、黒田の作品その他関係資料を保管し、毎週一回、一般に公開している。

A 研究・調査活動の概要

第一研究室、資料室の研究員は、日本、中国、中央アジア等、各々専門とする領域を中心に調査研究を進め、主要問題を捉え共同研究を行い、また常に精密な基礎資料の収集に努めている。文部省科学研究費にもとづく共同研究としては「院政前期より後期への様式展開に関する研究」（総合研究A、代表猪川主任研究官他7名）が着手され、課題の11～12世紀の彫刻、絵画の基準作品の調査、撮影、及び歴史的背景を究明する文献資料等の収集整理を行い、各分野の研究者との交流、研究会を行った。また、同じく文部省科学研究費による「法華経絵の研究」（一般研究B、代表宮主任研究官他5名）も初年度の調査研究として法華経関係経巻の見返絵及び法華経变相図等の写真資料を多数収集した。

第二研究室においては、近代美術史の調査研究、現代美術の動向調査、それらの資料収集を行いつつ、特に現代美術の動向調査については「日本美術年鑑」に集積した年度資料を発表している。継続中の特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前期・中期の基礎資料集成」は引き続き資料収集を行うかたわら、資料整備の段階に入った。

各研究員の調査研究及び2～3名の共同研究、また、他機関、大学における科学研究費総合研究への参加については、各自の調査活動の項、(B)、(C)、科学研究費題目(E)を参照されたい。なお、「美術研究」は本年度分287号から292号迄6冊を、「日本美術年鑑」は48年版を刊行した。

本年度は黒田清輝生誕百年を記念して、下記の各地で記念展を催し（6月～10月）、当研究所からも油絵50点、素描18点、写生帳等多数を出品し、第二研究室、庶務室各員が企画、陳列に参加した。

黒田清輝展

神奈川県立近代美術館（鎌倉市）、福岡県文化会館（福岡市）、鹿児島市立美術館（鹿児島市）、愛知県立美術館（名古屋市）、京都市美術館（京都市）

B 研究題目

岡 畏三郎 (美術部長)

〔Ⅰ〕日本近代絵画史の研究

明治末より大正期へかけての新絵画運動について巽画会、草土社、院展洋画部などを主に、作品並びに資料の収集整理を継続

〔Ⅱ〕現代美術の動向についての調査研究 (共同研究)

〔Ⅲ〕日本版画史の研究

〔Ⅳ〕日本近代美術の発達に関する、明治前・中期の基礎資料の研究〔特別研究〕

久野 健 (第一研究室長)

〔Ⅰ〕平安初期彫刻史の研究

〔Ⅱ〕中部地方彫刻の研究

〔Ⅲ〕白鳳彫刻の基礎的研究

〔Ⅳ〕運慶を中心とする藤原末鎌倉初期彫刻の研究

〔Ⅴ〕光学的方法による日本彫刻の調査研究

〔Ⅵ〕院政前期より後期への様式展開に関する研究 (共同研究)

田村 悦子 (主任研究官)

〔Ⅰ〕和漢の書蹟及び書道史の研究

(1) 鎌倉時代の上代様仮名書道及び書とあしでとの関係についての研究

(2) 国文学作品と書道との関聯についての研究

(3) 法華経絵の経文の書の研究 (共同研究)

〔Ⅱ〕異体字の歴史的研究

柳澤 孝 (主任研究官)

〔Ⅰ〕日本仏教絵画史の研究

(1) 奈良時代以降、特に平安・鎌倉時代の主要遺品に関し、光学的方法を援用する実証的な調査を実施して、技法の解明や様式的特色を明らかにするほか、図

V 研究活動及び事業

像学的な考察と文献的な考証にも及び、それぞれの作品の妥当な位置づけにつとめる。

(2) 廃寺永久寺真言堂伝来の絵画遺品の調査研究

(3) 法華経変相の調査研究（共同研究）

〔Ⅱ〕古代壁画の研究

(1) 高松塚古墳壁画調査研究の継続

(2) 鳳凰堂壁画に関する調査研究の続行

〔Ⅲ〕敦煌絵画の研究

敦煌請来画，特に密教関係画の調査研究。

宮 次男（主任研究官）

〔Ⅰ〕絵巻物の研究

絵巻遺品を網羅的に調査し、その編年的研究を行って様式の変遷をあとづけ、時代的・流派の特色を明らかにする。

〔Ⅱ〕経典説話図の研究

特に法華経関係説話図について、経巻見返絵及び法華経曼陀羅図を中心に、その図相の選択と定着について調査研究する。この研究に関し、本年度は「法華経絵の研究」の課題で文部省科学研究費（一般研究B）の交付をうけた。（共同研究）

〔Ⅲ〕肖像画の研究

似絵・高僧像・頂相・武将像を対象とし、その時代的特色と様式の変遷について調査・研究する。

猪川 和子（主任研究官）

〔Ⅰ〕飛鳥奈良時代彫刻史の研究

この時代における問題点を明らかにし、諸作例を検討し、基礎的研究に資する。

〔Ⅱ〕平安鎌倉時代彫刻の調査研究

(1) 平安時代以降の主要作品を調査し、文献を含めて資料の収集整理を行う。

(2) 院政前期より後期への様式展開に関する研究（共同研究）

〔Ⅲ〕尊像別分類による彫刻の研究

諸尊像の形式上の伝承と展開・系統を究め、歴史的背景を明かにし、特色、作風、変遷を明確にする。

田実 栄子 （主任研究官）

〔Ⅰ〕近世初期染織品の研究 — 上杉神社他所蔵の服飾類、名物裂系外来裂等の調査を通して —

〔Ⅱ〕小袖の研究 — 形態・模様の様式と技法・用布の地質等調査し、変遷を考究する —

〔Ⅲ〕伝統的染織技術の調査・研究 — 現代に伝わる技術の調査を通して、過去の染織技術を考察する —

〔Ⅳ〕上代裂の研究 — 主として東京国立博物館蔵品の正倉院裂・法隆寺裂を調査対象に —

関口 正之 （第一研究室）

〔Ⅰ〕密教画の研究

明王系画像の研究調査を継続。

〔Ⅱ〕法華経絵の研究（共同研究）

主として法華経变相図の比較研究。

〔Ⅲ〕院政前期より後期への様式展開に関する研究（共同研究）

院政前期より後期にかけて製作された仏教絵画の様式的変遷の研究。

中村伝三郎 （第二研究室長）

〔Ⅰ〕明治以降彫刻史の研究

近代主要木彫家の業績についての調査研究。

〔Ⅱ〕日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究（特別研究）

特に明治前期の彫刻・工芸関係文献資料（ウィーン万国博、工部美術学校、東京彫工会など）の調査検討をすすめる。

〔Ⅲ〕現代美術の調査研究（共同研究）

立体造型を中心に現代美術の動向を総合的に常時調査考究。

関 千代（主任研究官）

〔I〕 日本近代絵画史の研究

- (1) ウィーン万国博についての研究
- (2) 明治初期伝統美術復興についての研究
- (3) 大正期画家の調査と研究（共同研究）

〔II〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究（特別研究）

〔III〕 現代日本絵画の動向についての調査研究

坂本 満（第二研究室）

〔I〕 近代美術における東西交流

16世紀より19世紀に至る汎世界的な美術の交流を、絵画を中心として研究。

〔II〕 西欧版画史

15世紀以降の西欧美術における版画の展開とその役割（すなわち複数芸術としてイメージの媒体であると同時に、そのレパートリーとしての役割の美術史的な位置づけ（これはIとも関連する）を研究。

〔III〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究（特別研究）

陰里 鉄郎（第二研究室）

〔I〕 日本近代洋画の調査研究

主として大正期洋画家について

〔II〕 江戸洋風美術の研究

江漢、田善、慶賀などの伝記と作品

〔III〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査（特別研究）

〔IV〕 現代美術の動向について調査（共同研究）

川上 涇 (資料室長)

〔Ⅰ〕 中国絵画史の研究

中国絵画史研究の基礎作業として、宋元明清代の作品ならびに画家資料の収集整理を継続。

〔Ⅱ〕 江戸時代絵画における中国影響の検討 (共同研究)

東北大辻惟雄助教授を代表者とする科学研究費総合研究の分担。

上野 アキ (主任研究官)

〔Ⅰ〕 中央アジア古代絵画史研究

(1) 中央アジア絵画における東方要素とその浸透についての検討

〔Ⅱ〕 敦煌絵画の研究

〔Ⅲ〕 法華経絵画の研究 (共同研究)

江上 綏 (資料室)

〔Ⅰ〕 平安朝書跡資料に施された絵画装飾の研究

平安時代の書跡資料に施された絵画的装飾を絵画史的見地から研究する。科学研究費による「法華経絵の研究」を分担した (共同研究)。

〔Ⅱ〕 古代・中世初期絵画における自然物表現の研究

〔Ⅰ〕とも関連するところであるが、この期の自然物表現の変遷を研究する。

〔Ⅲ〕 日本古代文様の様式的、形式的研究

日本古代文様全体を様式、形式の両面から研究する。科学研究費による「院政前期より後期への様式展開に関する研究」を分担した (共同研究)。

鶴田 武良 (資料室)

〔Ⅰ〕 明清絵画の研究

〔Ⅱ〕 近代中国絵画の研究

海上派の成立を中心に

〔Ⅲ〕 江戸時代絵画における中国画影響の研究 (共同研究)

V 研究活動及び事業

河野 元昭 (資料室)

〔I〕 障屏画の研究

- (1) 桃山時代障屏画の研究
- (2) 江戸時代障屏画の研究

〔II〕 日本画家の研究

- (1) 狩野派の研究
- (2) その他の画派の研究

C 研究・調査活動 (昭和48.4～昭和49.3)

岡 畏三郎 (美術部長)

- 〔I〕 明治末、大正初期の新絵画運動については、当時刊行の諸資料のほか、作家及び遺族を訪ねての聞き書き、或は所蔵資料の調査により記録収集につとめている (継続)。
- 〔II〕 現代美術については都内における展覧会の調査が主となっている。
- 〔III〕 版画関係では、江戸後期浮世絵版画研究のほか、創作版画運動の足跡を示す版画作品が現代殆ど散失しているので、作品の所在調査を続けている。
- 〔IV〕 国立近代美術館の研究員を主体とする文部省科学研究費による「近代日本美術における1910年代の研究」(代表本間正義)に参加し、同期の洋画について、特に新興グループの活動について調査し、作品、未見の資料、作品の発見につとめた。(共同研究)

久野 健 (第一研究室長)

昭和48年5月には、城陽市の古代寺院址出土の塑像断片の調査撮影を行い、また、京都宝積寺の十一面観音像の調査を行う。

同9月5日より、新潟県糸魚川市及びその周辺の古仏調査、すなわち壬生寺の十一面観音像、大神社の男神像及び懸仏、毘沙門堂の毘沙門天、吉祥天、観音堂の如意輪観音像、東陽寺の胎藏界大日如来像等の調査を行う。

同10月1日より11月末日まで、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ギリシ

ヤ、インド、タイ等の美術館及び遺址に残る東洋古彫刻の調査を行う。

49年1月には、神奈川県芦名の浄楽寺の諸像の再調査を不動明王胎内銘札を中心として行う。これは科学研究費による研究の一部である。

同3月には、千葉県八日市場市の長徳寺不動明王像（正嘉元年銘）及び還来寺の阿弥陀如来像の調査を行う。

田村 悦子 （主任研究官）

- 〔I〕 (1) 45年度に原家旧蔵「伊勢物語絵巻」を研究し、46年天皇・皇后御訪欧記念日本美術展に出陳された伏見天皇宸翰伊勢物語詞は同絵巻の詞書の断簡であることを考証し、そのため鎌倉時代の上代様仮名書道の特徴を考察し、またこの絵巻詞書と料紙の下絵草手との間には、相互に関聯し而も単調に陥らないよう工夫が施されていることを究明した。
- (2) 国文学作品は大多数が仮名文であって制作・伝写の間に仮名書道と関聯をもってくるが、作品の性格と書の性格との間に相関の存する点に着目、その研究の間に得た「こわたの時雨」が文学作品としても特異のものであるので、これを校刊して学界に提供した。
- (3) 絵を伴う法華經の写本・版本の書風書体が一般の写經とどれだけ相異しその特徴が何に起因するかを考察した。
- 〔II〕 異体字の研究は奈良・平安に亘って諸種資料からの摘出を続行してきたが文字及び年代に従って整頓・配列する段階に進んだ。

柳澤 孝 （主任研究官）

- 〔I〕 (1) 平安前期の代表作、東寺三副古本両界曼荼羅に関し、光学的方法を援用して詳細な調査写真撮影を行ない、また同寺敷曼荼羅についても調査を実施し、その材質、技法、制作年代について検討を加えた。(2) 廃寺永久寺真言堂伝来の真言八相行状図に関する実証的な調査と写真撮影並びに藤田美術館蔵両部大經感得図の補足調査、さらに真言八相行状図の図像学的な関連において、福山明王院五重塔壁画の調査と写真撮影を行なったほか、天理図書館や永久寺院家末裔所蔵の永久寺関係資料の収集につとめた。(3) 法華經變相に関する共同研究と

V 研究活動及び事業

して、富山本法寺蔵法華經變相22幅と西明寺三重塔壁画の調査と写真撮影を実施した。

〔Ⅱ〕高松塚古墳総合学術調査会の専門委員として、同壁画に関する報告書の作成を引続き分担した。

〔Ⅲ〕敦煌請来画中の密教関係に関し、図像学的な整理を行なった。

宮 次男 （主任研究官）

本年度は科学研究費（一般研究・B）「法華經絵の研究」の交付をうけたので、この課題による調査・研究を重点的に行った。調査対象をあげると次の通りである。

- (1) 法華經見返絵一大山祇神社蔵3種15巻、八幡神社蔵8巻、善通寺蔵9巻、金剛峯寺蔵一品經28巻・中尊寺蔵7巻、本興寺蔵2種18巻、唐招提寺蔵10巻、百済寺蔵10巻、額川美術館蔵8巻、他
- (2) 法華經曼陀羅一本法寺蔵22幅、海住山寺蔵1幅、西明寺三重塔初層内部壁画、他
- (3) 金光明最勝王經金字宝塔曼陀羅10幀
- (4) 大陸作品一宮城国分寺蔵法華經1巻、宋版細字法華經見返（伝香寺蔵、善通寺蔵、保国寺蔵）

次に絵巻物の研究では、平治物語絵巻について研究を行い、その成果を美術研究289号に発表、また説話文学と絵巻の関係を追究した。

肖像画の研究は、高野山諸寺の藏品中、特に高僧像と武将像について写真資料を収集した。

猪川 和子 （主任研究官）

〔Ⅰ〕奈良時代彫刻としては京都平川庵寺塑像断片調査及び、城陽市三縁寺乾漆菩薩像等の調査撮影を行った。

〔Ⅱ〕平安鎌倉時代彫刻史研究については、昭和48年度科学研究費補助金を受けた「院政前期より後期への様式展開に関する研究」の課題に即し、京都・奈良の院政時代基準作例を調査（京都高田寺薬師如来像他）研究を行った。また、美術部公開講座において「藤原時代の彫刻」と題し、十世紀彫刻における和様の成立を中心に講演、この時代の主要作例を整理した。

〔Ⅲ〕尊像別の研究としては、東国所在の清涼寺式釈迦像、宮城竜宝寺、山形法来寺、山梨永泰寺、愛知慈光院等の諸像を網羅、紹介し、改めて考察を行った。

田実 栄子 （主任研究官）

研究題目の中、特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」に関しては、上杉神社蔵の上杉謙信・景勝所用と伝えられる服飾類中、武装服飾の下着類・頭巾・袴等の調査を行い、信長・秀吉・家康等の所用と伝えられる類品を並行して調査し、比較研究を進めた。

「小袖の研究」「上代裂の研究」は秋に開催された東博の「日本の染織展」出陳の遺品資料を通して進め、「伝統的染織技術の研究」は前年に引続き「型染」に関するものを主に行った。

関口 正之 （第一研究室）

法華経变相の研究では昭和48年4月に大分県宇佐神宮の神輿障子絵に描かれた法華経絵を調査し、10月に富山県本法寺所蔵の法華経曼荼羅を、12月に滋賀県西明寺三重塔初層壁画、49年2月には四国地方の法華経絵を調査し資料の収集に努めた。院政時代仏画の研究では安楽寿院所蔵仏画を調査し、更に密教画研究とも関連させて東寺所蔵の五大尊画像を始め数件の五大尊像の調査を行なった。

中村伝三郎 （第二研究室長）

〔Ⅰ〕（1）9月いっぱい、奈良県立美術館で特に力を注いで開催した「特別展・明治時代の彫刻 — 近代日本彫刻の胎動 — 」に協力指導を求められたこともあって奈良に出張、殊に前代以来この土地に住み、あるいは明治初期に奈良に赴き、わが伝統彫刻の新しい蘇生に努めた森川杜園や竹内久一、同時代の旭玉山、石川光明、高村光雲らの先覚、それに続く世代の山崎朝雲や米原雲海、滝沢天友らの出陳作品、また奈良美術院で国宝修理や模刻に専念した新納忠之介や竹林高行の諸模刻作品を初見するなど、実作品に当たっての調査並びに出陳作全般を通じての比較考察に従来の認識を改め深める好機会となった。

（2）東京国立近代美術館の研究員を主体とする文部省科学研究費補助金交付の

V 研究活動及び事業

総合研究「近代日本美術における1910年代の研究」に参加、当時代の代表的木彫家である米原雲海や内藤伸の業績に関して、出身地である島根県所在の諸作品と関係資料を実地調査した。研究題目〔Ⅱ〕及び〔Ⅲ〕に関しては、前年度に引続き、調査並びに資料の蒐集につとめた。

関 千代 (主任研究官)

- 〔Ⅰ〕 明治前半の美術史については、未だ不明な点も多いので、ウィーン万国博等をはじめ、具体的資料の探索を、国会図書館、公文書館等においてすゝめた。その結果若干の新資料を得られ、明治前期美術についての著るしい傾向が認められたので、それを明治宮殿杉戸絵成立と関連させ、これを48年度美術部公開学術講座において発表した。

8月宮内庁で杉戸絵80余図のカラーズライド撮影を行なう。

同月京都御所襖絵調査

(3)については、3月旧久邇宮邸天井絵(前田青邨他)の調査。11月、新潟県佐渡所在土田麦僊資料の調査(佐渡博物館一デッサン、下絵類。神宮寺。正覚坊等)がある。

- 〔Ⅱ〕 蜷川日記一奈良の筋道(三冊)の撮影と調査の継続。

坂本 満 (第二研究室)

(1)46年から47年にかけてヨーロッパで取材した西欧版画に関する研究を続行。(2)9月にスペイン南部の諸地域の聖堂、美術館等を調査。(3)12月および1月に京都国立近代美術館の「キリシタン美術の再発見・西洋と日本の出会い」展を調査。

陰里 鉄郎 (第二研究室)

研究題目Ⅰに関しては森田恒友の水墨素描、中村彝の油彩画を調査し、村山槐多、関根正二についてはなお調査を続行中である。

Ⅱの江戸洋風美術では、石川大浪の二、三の作品について調査の機会を得、研究の結果を報告した。また川原慶賀については作品・文献資料の調査をつづけている。

Ⅳについては、現代日本美術展(20年の展望)のカタログ作成に参加して、数多く

の現代美術家に関する文献目録を作成した。

川上 涇 (資料室長)

昭和48年5月に大和文華館展観の朝鮮画の調査、同年6月に台北故宮博物院の宋代画家作品の調査、昭和49年1月に長崎市の美術館・寺院および個人蒐蔵の明清画の調査撮影、同年2月に四国地方所在宋版法華経絵の調査撮影、同年3月に大阪市立美術館所蔵中国絵画の調査撮影を行った。

上野 アキ (主任研究官)

〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕本年度は特に「中央アジア絵画における東方要素とその浸透についての検討」の主題で科学研究費の交付を受け、国内に所在する中央アジア絵画及び模本類について調査を行なうとともに、従来なおざりにされていた敦煌との関係を重視するよう努めた。竜谷大学及び天理参考館所蔵の伏羲女媧図について、外国所在各本との比較検討及び大陸墓葬画、敦煌絵画との関連における墓葬画としての特質を考察したのはこの一端である。なおこの間敦煌についての資料も積極的に収集した。

〔Ⅲ〕法華経絵画の共同研究に於て敦煌の法華経変相の研究を分担し、資料の検討に当たったほか、本法寺法華経変相、西明寺三重塔壁画の調査に参加した。

江上 綏 (資料室)

大阪市立博物館の「法華経の美術」展に出陳された経典類や滋賀県西明寺三重塔内の壁画などを共同調査し、それらにおける文様や自然物表現を研究した。また、古筆切類についても同様の研究を行った。日本の古代文様と大陸との関係についても、資料の収集と研究を進めた。

鶴田 武良 (資料室)

48年9月合衆国フリーヤ美術館の中国人物画シンポジウムに出席、合わせて同館所蔵中国画の調査を行った。49年1月長崎地方所在の江戸時代絵画、明清画の調査を行った。近代中国絵画資料の調査、収集を継続して行った。

V 研究活動及び事業

河野 元昭 (資料室)

48年8月東京大学美術史研究室の企画した「京阪神地方個人所蔵琳派絵画の研究」に参加し、とくに酒井抱一を担当した。11月京都・西王寺において渡辺始興関係資料、善行院において尾形光琳墓碑を調査した。また11月から12月にかけて、昭和48年度科学研究費による「狩野探幽の研究」(奨励研究A)の一環として、大徳寺塔頭玉林院、龍光院、孤篷庵、徳禅寺において、探幽および探幽派の水墨障壁画を調査撮影、引続いて奈良・興福院の始興障壁画も調査した。49年1月、科学研究費「江戸時代絵画における中国画影響の研究」(代表理・辻惟雄東北大学助教授)の研究分担者の一人として長崎調査に参加、3月には瑞巖寺、本間美術館などにおいて研究主題にそって資料の収集に努めた。同月、姫路城管理事務所において抱一関係資料を調査した。

D 主要研究業績

①：著書②：論文③：解説
④：研究発表⑤：講演・放送⑥：その他
昭48.4～昭49.3

岡 畏三郎 (美術部長)

- | | | |
|----------------------------|---------------|---------|
| ①藤島武二 | 「日本の名画」31 講談社 | 48・7 |
| ①歌川広重 | 「日本の名画」12 講談社 | 49・1 |
| ①「北斎読本挿絵集成」2巻・5巻(編集・解説一共著) | 美術出版社 | 48・3,10 |

久野 健 (第一研究室長)

- | | | |
|--------------------|------------------|-------|
| ①天福寺本尊十一面観音像 | 近藤出版社 | 48・4 |
| ①夢殿観音と百済観音 | 岩波書店 | 48・10 |
| ②飛鳥の仏師 | 研秀出版「飛鳥古京」所収 | 48・4 |
| ②嘉暦二年銘如来立像と康暦元年銘懸仏 | 史跡と美術 434 | 48・5 |
| ②観心寺の平安初期仏像について | 国華 961 | 48・9 |
| ②中部地方の古代銅像 | 美術研究 291 | 49・3 |
| ③常滑市の彫刻 | 「常滑市指定文化財図録一集」所収 | 48・4 |
| ③諸家愛蔵彫刻 | 「諸家愛蔵仏教美術秘宝」所収 | 48・6 |
| ④藤原時代の彫刻 | 寧楽会 | 48・6 |
| ④円空、木喰仏の源流 | 朝日講堂 | 48・7 |

- | | | |
|-----------|-----------|------|
| ④円空彫刻について | 名古屋円空学会 | 48・8 |
| ④運慶前後 | 文京会館 | 49・2 |
| ④運慶の彫刻 | 鎌倉三井銀行会議室 | 49・2 |
| ④鎌倉時代の彫刻 | 寧楽会 | 49・3 |

田村 悦子 (主任研究官)

- | | | |
|-------------------------------------|----------|------|
| ②吉田忠氏蔵古写本『こわたの時雨』公刊 下 | 美術研究 287 | 48・5 |
| ②御物伏見天皇宸翰伊勢物語について
—原家旧蔵伊勢物語絵巻の断簡 | 美術研究 288 | 48・7 |

柳 澤 孝 (主任研究官)

- | | | |
|-------------------------------|----------|-------|
| ①仏教美術文献目録1960～1969年(共著) | 中央公論美術出版 | 48・9 |
| ③新国宝(両部大経感得図)の思い出 | 芸術新潮 281 | 48・5 |
| ③普賢菩薩他5件(望月信成編『諸家愛蔵日本仏教美術秘宝』) | 三彩社 | 48・6 |
| ③薬師浄土変相図他6件(『中国美術』第一巻 絵画I) | 講談社 | 48・10 |
| ⑤古代壁画と高松塚古墳壁画 | 横浜市教育委員会 | 48・4 |

宮 次 男 (主任研究官)

- | | | |
|-------------------------|----------------|--------------|
| ①日本の地獄絵 | 芳賀書店 | 48・10 |
| ②説話と絵巻 | 小原流挿花23-4 | 48・4 |
| ②「平治物語」諸本中における平治物語絵巻の位置 | 美術研究 289 | 48・9 |
| ②説話文学と絵巻 | 東京美術「日本の説話」3 | 48・11 |
| ③お伽草子の世界 | 絵本 2 | 48・6 |
| ③装飾経にみる美と信仰 | 小原流挿花24-1 | 49・1 |
| ③絵巻入門(25～34) | 日本美術工芸 415～425 | 48・4
49・2 |

猪川 和子 (主任研究官)

- | | | |
|-------------------|----------|------|
| ②紀三井寺護国院と観心寺の観音立像 | 美術研究 287 | 48・5 |
|-------------------|----------|------|

V 研究活動及び事業

- ②東国の清涼寺式釈迦像 三浦古文化14 48・9
- ⑤藤原時代の彫刻 美術部公開学術講座 48・10

田実 栄子 (主任研究官)

- ②上杉家伝来鍔下着・着込み・頭巾等四領二個 上
伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告六一 美術研究 291号 49・3
- ⑤舞楽装束とその遺品 東京国立文化財研究所開所記念講演会堂 48・11
西洋美術館講堂

関口 正之 (第一研究室)

- ②宇佐神宮の神輿障子絵について 美術研究 289 49・2
- ④宇佐神宮の神輿障子絵 美術部研究会 48・5
- ④宇佐神宮の神輿障子絵について 美術史学会全国大会 48・5

中村伝三郎 (第二研究室長)

- ②平櫛田中 — 人と芸術 — 形象12 48・4
- ②荻原守衛 — その生涯と芸術 — (中) 5 美術研究 290 49・3
- ③美術館にある“都宝”について — ヘルナールの浮彫「舞踏」 —
美術館ニュース 267 48・4
- ③菅原安男教授退官記念展によせて 東京芸大陳列館・同彫刻展目録 48・4
- ③石井鶴三氏を悼む 三彩 302 48・5
- ③「明治時代の彫刻」展に寄せて 奈良県立美術館・同展目録 48・9
- ③ベナンソ・クロチエティ氏と私 現代彫刻センター・同展目録 48・9
- ③児玉幸雄さんと私 日動サロン・同洋画個展目録 48・11
- ⑤明治時代の彫刻について 奈良県立美術館 48・9
- ⑥黒田清輝没後50年記念展に寄せて (座談会・隈元謙次郎ら三氏と共に)
南日本新聞 48・9
- ⑥蓮田脩五郎展をみて 三彩 309 48・11
- ⑥日展をみて (日本画・洋画・彫塑・工芸) 東京新聞夕刊 48・11

関 千代（主任研究官）

- ②土田麦仙 日本美術 100 号 48・9
 ③川合玉堂筆「逝く春」 月刊文化財 115 号 48・4
 ⑤明治宮殿杉戸絵について 美術部公開学術講座 48・10

坂 本 満（第二研究室）

- ①世界版画大系第5巻（J・アデマール，吉川逸治氏と共同編集，翻訳・概論執筆）
 筑摩書房 48・5
 ①同上，第6巻 48・7
 ①同上，第7巻 48・9
 ①同上，第8巻 48・11
 ①同上，第9巻 49・2
 ①ゴヤ・巨匠の世界（J・グディオール，神吉敬三氏と分担執筆，ゴヤの版画担当）
 小学館 48・5
 ②眼鏡箱・遠近法の虚と実 本の手帖 8 49・1
 ③「キリシタン美術の再発見・西洋と日本の出会い」展を見て 「視る」 80 49・1
 ④La Mission catholique et la peinture du style occidental dit "Namban"
 au Japon de la fin du XVI^e et du début du XVII^e siècle
 XXIII Congreso internacional de historia del arte ,
 Granada (España) (スペイン・グラナダ第23・国際美術史学会) 48・9

陰里 鉄郎（第二研究室）

- ①萬鉄五郎（日本の名画34） 講談社 48・4
 ②石川大浪筆ヒポクラテス像をめぐるミュージアム ミュージアム 268 48・7
 ②明治洋画とフランス 現代の眼 226 48・9
 ②無形視覚の画家・中村彝 絵 117 48・11
 ②森田恒友の素描の世界 三彩 309 48・11

V 研究活動及び事業

- ②萬鉄五郎（生涯と芸術・五） 美術研究 290 48・11
- ③垂歇堂田善作「西洋公園図」とリボー原画「フォンテーヌブロー宮」の銅版画 美術研究 288 48・8
- ④石川大浪筆ヒポクラテス像とその原図 蘭学資料研究会 48・10
- ④オランダ所在の川原慶賀作品について 美術部研究会 49・3
- ⑥オランダの司馬江漢 本の手帖 6 48・7
- ⑥二科・院展・新制作・日展評 共同通信 48・9
～ 11

川上 涇（資料室長）

- ③文化大革命中の中国出土文物図版解説 朝日新聞社 48・7
- ⑤日本美術と中国美術 岩波ホール 48・7

上野 アキ（主任研究官）

- ②アスタナ出土の伏羲女媧図について（上） 美術研究 292 49・3
- ③サー・オーレル・スタインのこと（国際版世界の美術館・大英博物館） 講談社 48・10
- ⑥東洋美術作品解説・訳 （ ” ” ” ” ）

江上 綏（資料室）

- ②東亜文様・意匠の源流と展開 4～11 日本美術工芸 415～421, 423 47・4～10, 12
- ④フリア美術館蔵の六道図 — 主としてその動物表現について — 美術史学会全国大会 47・5

鶴田 武良（資料室）

- ③中国の現代絵画 東京セントラル美術館・中国現代絵画展目録 48・11
- ⑥中国画壇の現状 中日新聞 48・11

河野 元昭（資料室）

- ①尾形光琳（日本の名画 5） 講談社 48・12

②校刊「蘆雪翁追薦展観画録」	美術研究 288	48・12
②渡辺始興筆真写鳥類図巻について 上	美術研究 290	49・3
③若沖・蘆白・蘆雪（水墨美術大系14）年講及参考文献	講談社	48・9
③世界美術小辞典項目解説	芸術新潮 283	48・7
③圓山応挙筆東山三絶図補考	国華 963	48・11
④狩野英信筆陽明門壁画について（保存科学部・石川陸郎技官と共同発表）	美術部研究会	48・5

E 科学研究費題目

（Ⅳ 予算2 科学研究費補助金交付決定額の項参照）

（2）芸 能 部

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的理論的研究を行う。

芸能部は、演劇研究室・音楽舞踊研究室・郷土芸能研究室より成る。

演劇研究室は、日本古典演劇を、音楽舞踊研究室は、日本古典音楽および日本古典舞踊を、郷土芸能研究室は、全国に分布する民俗芸能を、それぞれの研究対象とする。

A 研究。調査活動の概要（昭48.4～昭49.3）

芸能部全員による共同作業としては、蓄積された資料のうち録音テープの整理に本年度の中心を置いた。共同研究は各室単位に行なった。

演劇研究室においては、(1)各地の大学・図書館の演劇資料の調査・撮影を続け、(2)「歌舞伎新報」の索引カードの作成を行った。

音楽舞踊研究室においては、(1)能の様式の研究、(2)寺院行事の研究を続行した。(1)については、能楽全般にわたる構成および技法の研究成果を公表する準備を行なった。なお、芸能部録音室において、「年令経過に伴う歌唱技法の変化の研究」のための初年度録音を、観世暁夫・野村耕助によって行った。

郷土芸能研究室においては、沖縄への渡航をはじめ、各県に出張しての実地調査のほか、全国および地方ブロック別の民俗芸能大会に出場した芸能の撮影・録音を行っ

た。

別に、音楽舞踊・郷土芸能の両研究室では、安原コレクション邦楽レコードの整理を続け、「音盤目録」Ⅲの刊行準備を進めた。

なお、各研究室は人員微少のため、随時他の研究室員の参加を求めた。

本年度の刊行物に、「芸能の科学」5としての「芸能論考」Ⅲがある。

B 研究題目

浦山 政雄（芸能部長）

〔Ⅰ〕 近世戯曲の系統的研究

歌舞伎脚本・浄瑠璃丸本・役者評判記・番付類の基礎資料により、近世戯曲の歴史的変遷を系統別に検討する。

〔Ⅱ〕 歌舞伎演出史の研究

歌舞伎脚本・役者評判記・画証資料などによる演技演出の歴史的変遷を、現行の演出と比較し、歌舞伎演技譜の形にして標準的演出を記録する。

中村 茂子（演劇研究室）

〔Ⅰ〕 かけ踊の研究

かけ踊の発生・変遷および現状を明らかにする研究

〔Ⅱ〕 長野県における獅子舞と若者組の研究

獅子神楽伝承の組織とその方法を明らかにする研究

宮本 瑞夫（演劇研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 地方芸能文化史における舞台の研究

全国に分布する農村舞台のうち、とくに人形劇・歌舞伎など近世劇舞台の変遷・現況を明らかにし、あわせて、その伝承芸能・文献資料を蒐集・調査する。

〔Ⅱ〕 享保期歌舞伎の研究

歌舞伎台帳・絵入り狂言本・役者評判記・番付などによる享保期歌舞伎の研究。とくに、この期に活躍した役者兼作者の市山助五郎の伝記・芸風・作劇法などの調査研究。

横道萬里雄 (音楽舞踊研究室長)

〔Ⅰ〕 能の様式の研究 (共)

年間研究調査活動に記した通りである。

〔Ⅱ〕 各宗派声明・寺院行事の比較研究

佐藤道子技官を中心とする研究に参加した。

佐藤 道子 (音楽舞踊研究室)

〔Ⅰ〕 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗各派にわたる総合的比較研究を行ない、その変遷・分化をあつづける。

〔Ⅱ〕 能の様式の研究

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松本 雅 (音楽舞踊研究室) 研究員 (非)

〔Ⅰ〕 能の脚本史の研究

能の脚本史における〈二場形式〉の成立過程について。

〔Ⅱ〕 語り物芸能の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅲ〕 能の様式の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

三隅 治雄 (郷土芸能研究室長)

〔Ⅰ〕 沖縄の民俗芸能の研究

琉球列島のうち沖縄・宮古・八重山に伝承される民俗芸能の実態調査と、その分布・分類・技法、民俗に関する研究。

〔Ⅱ〕 民俗芸能の交流・伝播に関する研究

全国に分布する民俗芸能の交流・伝播の様子、小地域単位に観察し、わが国における芸能伝承の論理を究明する。

〔Ⅲ〕 獅子舞の研究

全国各地に広い分布を示す獅子舞の調査研究。

〔Ⅳ〕 民謡歌詩集成の研究（共）

研究調査活動欄に記したの仲井幸二郎の研究に加わった。

仲井幸二郎（郷土芸能研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 郷土芸能の研究

芸能の行なわれる場所、及びその機会に発唱される詞章の芸謡的要素に関する研究。

〔Ⅱ〕 民謡の研究

特に芸謡的要素を持つ民謡に関する研究。

〔Ⅲ〕 話芸・寄席芸の研究

邦楽レコードを通して、落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究。

〔Ⅳ〕 民謡歌詞集成の研究（共）

研究調査活動欄に記した通りである。

C 研究・調査活動（昭48.4～昭49.3）

浦山 政雄（芸能部長）

近世戯曲の系統的研究のため、東京大学国語研究室所蔵の大惣本の歌舞伎台帳を調査した。また東京芸大図書館・国立国会図書館・早稲田大学演劇博物館所蔵の浄瑠璃丸本・番付類などに当り、公表資料を準備した。

歌舞伎演出史の研究のため、歌舞伎音楽、特に下座音楽及びチヨボの五線譜化の研究を続け、歌舞伎演技譜の表示方法について研究考察した。

中村 茂子（演劇研究室）

かけ踊の研究については、主に長野県に伝承されている盆行事としてのかけ踊の資料の収集を行なった。

獅子神楽伝承の組織については飯山地方・須坂地方における資料の収集を行ない、あわせて子供組によって行なわれている諸行事の調査を行なった。

宮本 瑞夫（演劇研究室）研究員（非）

農村舞台の研究のため、宮城県名取郡秋保・埼玉県秩父市白久・愛知県北設楽郡田峰などの近世劇舞台およびその芸能を調査・記録した。

享保期歌舞伎の研究のため、早大演劇博物館・早大図書館・東京芸大図書館・実践女子大図書館・東大国文研究室・東京国立博物館・東洋文庫などで、主として台帳・役者評判記などの調査・写真撮影を行なった。

その他、「歌舞伎評判記集成」「義太夫年表近世編」の調査・編集に参加した。また、雑誌「歌舞伎新報」の索引カードを作成・整理した。

横道萬里雄（音楽舞踊研究室長）

能の様式の研究については、年間調査活動の概要欄に記した通りである。

各宗派声明・寺院行事の研究については、東大寺・延暦寺、金剛峰寺・唐招提寺・四天王寺等について調査を行ない、また本門寺・知恩院等について基礎調査を行った。

佐藤 道子（音楽舞踊研究室）

東大寺修二会を中心とする、全国主要古寺の悔過会についての研究調査は、41年度以降継続的に実施しているが、本年度は、備前西大寺修正会・東大寺修二会について調査を行なった。

また、44年度から実施している延暦寺の主要行事の研究調査については、叡山講・長講会・滋賀院行事について調査を行なった。

その他、金剛峰寺の弘法大師生誕1200年記念法会の調査、知恩院年中行事の基礎調査などを行なった。

能の様式の研究については、年間調査活動の概要欄に記した通りである。

松本 雅（音楽舞踊研究室）研究員（非）

能の脚本史の研究のため、今年は修羅能を取り上げ、特に小段構成の分析・分類をおこない、作者別の特徴などを考察した。また、演能調査も続行した。

語り物芸能の研究、能の様式の研究については、年間研究活動の概要欄に記した通りである。

三隅 治雄 (郷土芸能研究室長)

沖縄の民俗芸能については、本年度3回にわたって現地調査をし、エイサー・臼太鼓・綱引・打花鼓・棒・獅子舞・組踊などについて撮影・録音を行なった。

民俗芸能の伝播交流については、鹿児島県川辺郡坊津町を中心とした薩摩半島南部地帯の芸能を各種調査し、この地方における本州文化と南方琉球列島文化との交流の様相を観察した。また、長野県下伊那郡地方における獅子舞の伝播・交流の調査研究を行なった。

獅子舞については、神奈川県足柄下郡宮城野村・静岡県周智郡森町・愛知県南設楽郡鳳来町・長野県飯田市・下伊那郡高森町・上伊那郡中川村・辰野町・駒ヶ根市等の獅子舞を調査し、撮影録音を行なった。

その他、千葉県館山市のみろく踊・長野県上伊那郡辰野町の鉾立祭などの調査を行ない、また例年の通り全国民俗芸能大会等催し物の撮影・録音を行なった。

仲井幸二郎 (郷土芸能研究室) 研究員 (非)

芸能の行なわれる場所の研究に関しては、その第1回として「境」についての論考をまとめ、発表するとともに、次回のテーマ「道中の芸能」に関し、研究・調査を続行している。

民謡の研究に関しては、各地民謡歌詞のカード化を続け、さらにそのうちから、芸謡的要素をもつ民謡歌詞の選別を行なっている。

上記各テーマの研究・調査を目的として、本年度は茨城県方面の現地採集調査を行なった。

また、民謡歌詞集成の研究については、各地伝承の民謡歌詞を既刊書目・現地調査資料等から採集する作業と、その整理・分析を続けるとともに、民謡歌詞調査表についての検討など、現地調査のための準備を開始した。

D 主要研究業績 ①：著書②：論文③：解説
④：研究発表⑤：講演・放送⑥：その他
(昭48.4～昭49.3)

浦山 政雄 (芸能部長)

- | | | |
|------------------|----------|-------|
| ② 絢交ぜと世界 | 芸能の科学 5 | 49・1 |
| ③ 長谷川政春編「折口信夫」書評 | 「芸能」15-4 | 48・4 |
| ③ 随想 心謎解色系 | 国立劇場プロ | 48・6 |
| ⑤ 見得の構造 | 朝日講堂 | 48・12 |

中村 茂子 (演劇研究室)

- | | | |
|-----------------|----------|------|
| ③ 秋元松代著「菅江真澄」書評 | 「芸能」16-2 | 49・2 |
|-----------------|----------|------|

宮本 瑞夫 (演劇研究室) 研究員 (非)

- | | | |
|----------------------|-------------|---------------|
| ③ 「万有百科大事典 5・6」 | 小学館 | 48・4
49・2 |
| ③ 「学芸百科事典 1～3」 | 旺文社 | 48・10
49・2 |
| ③ お正月の行事 | 報54 | 49・1 |
| ④ 輪読「百合若大臣野守鏡五段目」 | 近松の会 | 48・7 |
| ④ 狂言本「歌枕廻国西行法師」(共同) | 近松の会 | 48・9 |
| ④ 岩瀬本「役者大鑑」の成立 | 評判記の会 | 48・12 |
| ④ 再び「役者大鑑」の成立について | 近松の会 | 49・2 |
| ⑤ 日本文化の民俗学的なとらえ方 | 早大日本語教育公開講座 | 48・7 |
| ⑥ 「歌舞伎評判記集成 3・4」(共同) | 岩波書店 | 48・7
48・12 |
| ⑥ 翻刻「歌枕廻国西行法師」(共同) | 立大日本文学31 | 49・3 |

横道萬里雄 (音楽舞踊研究室長)

- | | | |
|-------------------|------------|-------|
| ② 能における「越天楽今様」の摂取 | 芸能の科学 5 | 49・1 |
| ③ 能楽研究の展望 (共同) | 文学 7 | 48・7 |
| ④ 舞楽の楽曲構成 | 研究所開所記念講演会 | 48・11 |
| ⑤ 文化財としての能 | 金沢婦人文化会館 | 48・10 |

V 研究活動及び事業

佐藤 道子 (音楽舞踊研究室)

② 神名帳 — その性格と構成 —

芸能の科学 5 49・1

松本 雅 (音楽舞踊研究室) 研究員 (非)

④ 乱拍子の比較

能楽懇談会 48・10

⑥ 「檀風」上演記録

能—研究と評論— 48・12

⑥ レコード「黒川能」解説

朝日ソノラマ 48・5

⑥ レコード「能楽囃子大系」解説 (共)

日本ビクター 48・11

三隅 治雄 (郷土芸能研究室長)

② 世乞いのまつりと神々

青い海 4・48・7

② 小地域における芸能の伝播と受容

芸能の科学 5 49・1

③ 日本の道化

悲劇喜劇73年 5 48・5

③ 民俗芸能の中の花

朝88 48・6

③ 神道要語集「翁」

日本文化研究所紀要33 49・1

④ 南島の芸能

南島史学会 48・5

⑤ 祭りの歴史

練馬区市民講座 48・5

⑤ 日本の民俗舞踊

鹿児島県立文化センター 48・7

⑤ 日本の伝統芸能

金沢県立能学堂 48・10

⑤ 民俗芸能の変遷

文化庁文化財指導者講習会 48・11

⑤ 日本の民俗芸能

八代市文化会館 49・3

⑥ 国立劇場沖縄芸能公演監修

49・1

仲井幸二郎 (郷土芸能研究室) 研究員 (非)

② 境の芸能

芸能の科学 5 49・1

④ 歌謡から生まれた人物

説話文学会 48・6

⑥ はかられた話

「三田の折口信夫」 48・10

E 科学研究題目

(IV 予算2 科学研究費補助金交付決定額の項参照)

(3) 保存科学部

文化財の材質・構造の科学的分析研究、並びに文化財のおかれていた保存環境の科学的研究を行ない、これを基盤として文化財の保存に関する技術的研究をしている。換言すれば、文化財の自然科学的研究、文化財を資料とする科学技術史的研究、文化財の保存のための科学技術の応用研究の三方面がある。

研究組織としては、化学研究室・物理研究室・生物研究室の3研究室からなっている。但し修理技術研究室は本年度から独立して修復技術部に発展改組された。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。即ち文化財を構成している各種素材の同定・分析から老化・崩壊過程の究明とその防止の化学的研究である。分析には微量分析及び非破壊分析を主として行なっている。又空気汚染の文化財への影響或は黴・細菌および虫害防除のための燻蒸剤をはじめ薬剤の適否、燻蒸後の薬剤廃棄等についての研究を行なっている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表に関する業務をつかさどると規定されている。文化財自身の構造・強弱・安定等研究のため、力学的試験を行ない或はX線写真・γ線写真等の特殊撮影を応用している。又、文化財の保存環境に関し、採光・照明・温湿度等の文化財に及ぼす影響とその防止の研究を行ない、例えば美術品の展示、収蔵や梱包輸送に関し適正条件の設定と調節技術を開発する一方、新施設使用の際の必要処置の研究などを行なっている。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。文化財に使用され又随伴している動植物的材質の判定を行なうとともに黴・細菌・昆虫等による文化財の被害の防除のため保存環境の改

V 研究活動及び事業

善並びに黴・細菌・昆虫等の採取・培養・同定並びに殺菌・殺虫のための薬剤と方法の開発を行なっている。

A 研究・調査活動の概要

特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」は昭和48年度で3年計画を完了した。一応「保存科学」12号に研究成果の発表をまとめて行なったが、すべての問題点につき解決が得られたわけではなく、今後研究を続行せねばならぬ課題も残っている。

保存科学部が主として受けた受託研究は加曾利貝塚遺跡、中田横穴、虎塚古墳に関するものであり、三者とも来年度に継続する。高松塚古墳の保存については当部は二名の調査委員を送り、部全体としてこれに協力しているが、これを含めて地表及び地下の現象の研究が増加したのが本年度の特徴であろう。

蛍光X線・X線回折等による非破壊的分析での材質同定・X線・ γ 線などの透視による内部構造・欠陥などの解明等ほぼ常套的となった研究手段は引き続き必要ある毎に利用し、個々の対象物の保存問題解決に役立てている。今年度は特に桂離宮の書院建築をX線により調査した。大気汚染・屋内汚染の研究、文化財中の有機材質についての研究も引き続き行なっている。

黴害・虫害防止についても実際問題に数多く貢献しているが、今年度は新燻蒸剤バイケンの有効性を確認し、採用を始めた。

B 研究題目

登石 健三 (保存科学部長)

〔I〕 新施設内の保存環境

施設建設過程・使用材料等と屋内汚染との関係を実際の新施設について調査研究した。

〔II〕 地表・地下における水分移動とガス分布

遺跡・古墳内等の状態に関連して一般論の考究。

〔III〕 コンクリートより発散される苛性粒子の研究

〔IV〕 X線による透視研究 (共)

今年度は特に桂離宮書院の壁内構造を調査。

〔Ⅴ〕 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」(共)

総括及び剥離機構分担。

江本 義理 (化学研究室長)

〔Ⅰ〕 文化財の材質に関する研究

- (1) 非破壊的方法, 微量試料による諸分析法とそれらの精度向上に関する研究。
- (2) 文化財の広範囲の材質の判定と, それらの劣化現象, 年代, 産地の標準試料の材質に関する分析データの蓄積。

〔Ⅱ〕 考古遺物, 遺跡に関する考古化学的研究

埋蔵環境, 発掘時, 保管時における変質現象の過程および機構の究明。

〔Ⅲ〕 保存環境の文化財に及ぼす影響に関する研究

城 敏子 (化学研究室)

〔Ⅰ〕 漆塗膜の硬化, 劣化過程と古代漆との関連の研究

赤外吸収スペクトルを測定し, 硬化, 劣化過程を追求し, 古代漆の劣化の条件を推定し, 保存法を研究。

〔Ⅱ〕 油絵の保存の研究

日本特有の環境の中に保存されている油絵の劣化現象を基礎研究と実際の劣化との関連をつけながら研究。

〔Ⅲ〕 新建材の揮発成分の研究

揮発成分を赤外吸収スペクトルで測定し, 油絵や漆芸品に及ぼす影響を研究。

〔Ⅳ〕 古墳内の環境調査

- (1) 古墳内の温湿度と壁の含水率を測定し, 壁画の変退色を見る。
- (2) 古墳内の有機ガス及び土壌に含まれている有機ガスの研究。

門倉 武夫 (化学研究室)

〔Ⅰ〕 文化財の保存環境に関する研究

陳列室, 収蔵庫等の文化財環境で悪影響を及ぼす因子を究明するための調査

測定を行なった。

〔Ⅱ〕 古墳内部の環境に関する研究

古墳内部空気を分析し、その組成から保存方法、汚染の防除方法を検討、続行中。

〔Ⅲ〕 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」 — 環境について —
空気汚染分担。

〔Ⅳ〕 くん蒸剤の廃棄処理方法

石川 陸郎 (物理研究室)

〔Ⅰ〕 青銅美術品の製作技法に関する研究

鑄造時における金属の組織および加工度を知り製作技法を解明する。

〔Ⅱ〕 遺跡保存に関する研究

遺構表面、貝塚断面などの崩壊防止のための温湿度調節による研究。

〔Ⅲ〕 放射線による透視研究

文化財内部構造、欠陥等の解明。

〔Ⅳ〕 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」環境部門一部分担。

三浦 定俊 (物理研究室)

〔Ⅰ〕 古建築内温湿度の研究

外気と室内空気の相関及び、その建築様式・立地条件による違い等についての研究

〔Ⅱ〕 空気・木材系のシステム解析

空気湿度変化緩和材としての木材の特性を解析し、〔Ⅰ〕の研究の基礎資料とする。

〔Ⅲ〕 感湿素子の開発

古文化財の保存環境測定に適した、高湿度領域で信頼性の高い湿度計の開発研究。

新井 英夫 (生物研究室)

〔Ⅰ〕 文化財の微生物劣化に関する研究

文化財の生物劣化を微生物学的観点から研究する。すなわち、各種材質の劣化要因となる微生物の分離ならびに生育条件の研究。

〔Ⅱ〕 文化財の生物劣化防除に関する研究

文化財の劣化要因となる生物の防除を目的とし、各種薬剤の殺菌・殺虫効果及び防除方法の研究。

森 八郎 (生物研究室) (非)

〔Ⅰ〕 文化財の虫害劣化に関する調査研究

文化財の虫害劣化の調査、すなわち、文化財を加害する昆虫の採集とその種類の同定、被害程度・状況ならびに発生原因・環境条件などの調査研究。

〔Ⅱ〕 文化財の虫害劣化防除に関する研究

文化財の虫害劣化を防止するためには、予防と駆除の両面があるので、この見地から、防虫剤ならびに駆除剤の効力試験とその使用法に関する研究。とくに、ここ数年来有機塩素系薬剤が公害問題で使用困難となってきたので、本年度はこれに代わる低毒性薬剤の選出ならびに残留毒性のない燻蒸剤の文化財への使用を検討した。

C 研究・調査活動 (昭48.4～昭49.3)

登石 健三 (保存科学部長)

高松塚の保存に関して、4、5、10月、49年2、3月保存対策調査会に出席した。
又飛鳥保存財団の高松塚保存整備委員会に12月出席した。

埋蔵文化財対策調査会に専門委員として参加、5月、6月(2回)会議に出席した。
東京国立博物館に対しては法隆寺宝物館の染織品保存に関して4月懇談会に出席した。又49年度開催されるモナリザ展の展示計画に参加、フランス側関係者との打合せ会議に出席した。奈良国立博物館新館設立については前々より技術的な面で協力してきているが、今年度は竣工後の館内保存環境の調査を行なった(5月)。このほか館内保存環境調査を行なった所は、飛鳥資料館(49年3月)、「群馬の森」美術館(10月)、安房博物館(11月)などである。遺跡古墳等の保存状態調査は受託研究として受け、

加曾利貝塚遺跡・中田古墳・虎塚古墳へは随時出張して調査を行なった。地方博物館設立に協力、熊本県（6月）、岩手県（8月）に赴いた。宮内庁よりの委嘱により7月、11月各数日に亘り、桂離宮書院建築のX線透視を行なった。

江本 義理 （化学研究室長）

材質および考古化学 — 高松塚古墳壁画保存に関し、保存対策調査会（壁画および保存施設部会、壁画修復分科会）に参加。現地調査に際しては、石室内外の温湿度、微生物ガス濃度等の環境変化の基礎データの収集、壁画状態の調査、イタリア技術者による壁画修復処理に協力、同作業時の石室内の空気浄化に当たった。（48. 10）。漆喰層の研究において新知見を得た。

福島県羽山横穴古墳において、現状調査と応急対策の助言を行なった（48.6）。茨城県虎塚古墳においては、未開口石室内の環境測定に関し現場での事前打合せ（48.8）、開口直後の調査、保存対策応急処置の指導、石室周辺土壌の調査（48.9）を行なった。福島県中田横穴の壁面の経年変化（48.7, 49.2）、北海道フゴッペ（余市）手宮（小樽）洞窟壁面および保存施設等の状況調査に参加した（48.11）。

環境の影響調査 — 奈良国立博物館新館の展示環境調査（48.9, 49.2）、および京都市、岡崎市所在の書院等の障壁画彩色層の劣化に関し調査を行なった（49.2）。

見城 敏子 （化学研究室）

春日大社の収蔵庫の環境調査で、ヒノキ材の使用されている庫内の汚染雰囲気に、基礎研究を応用し、効果をあげた。

新燐蒸剤バイケン（弗化サルフリル）が顔料、油絵、染料等の材質に及ぼす影響を研究した。

中田横穴古墳内の温湿度を測定し、古墳内の温湿度分布を研究。又虎塚古墳横穴式石室未開口時の石室内の温湿度を測定し、空気、土壌を採取し、研究室に持ち帰り、赤外吸収スペクトルで測定した。

門倉 武夫 （化学研究室）

文化財の保存、展示環境に及ぼす汚染空気の影響を究明するため、環境空気中の

イオウ酸化物、窒素酸化物を測定し、汚染因子の挙動、経年変化について検討中。本年度は、従来の調査地点に富士美術館（富士宮市）陳列室内外5ヶ所を加えて測定中。

奈良国立博物館新陳列室内の環境調査（48.9），イオウ酸化物等の測定を行なった。又、新造の東京国立博物館収蔵庫内部環境について調査を行ない続行中。

特別研究に関して京都市内6寺院の書院内外合計10ヶ所で障壁画環境の空気汚染因子を測定し、報告書を作成した。

古墳内の保存環境の研究として虎塚古墳（勝田市）において発掘中（48.8）及び埋戻し後半経過した内部空気を分析した（一部受託）。又中田横穴古墳の内部環境について入室による内部空気汚染状況を調査した（受託）。

文化財くん蒸後の薬剤処理方法を実験し、吸着筒を試作しテスト中である。

石川 陸郎（物理研究室）

受託研究として加曽利貝塚の保存環境について湿度調節を行ないながら貝層断面の保護にあたっている。また福井県武生の岩内山古墳の調査に参加した。特別研究の一環として京都二条城、南禅寺において年間を通して温湿度記録を行い障壁画の保存についての基礎資料を作成した。新築博物館・美術館等の保存環境および展示施設について指導を行った。その内訳は茨城県歴史館、瀬戸内海歴史民俗資料館、町田市郷土資料館、岩手県民会館および群馬の森美術館等が調査対象である。

桂離宮内書院の壁体のX線透視を行い、解体修理のための基礎資料を提供した。

三浦 定俊（物理研究室）

昨年より継続して京都府浄瑠璃寺本堂内の温湿度記録をとり研究を行なっている。また、秋には浄瑠璃寺三重塔・海住山寺五重塔・醍醐寺五重塔の湿度と板絵の調査を行った。

新築博物館の保存環境調査として、瀬戸内海歴史民俗資料館の調査を行った。また、東京国立博物館新収蔵庫内の湿度についても継続調査を行っている。

新井 英夫（生物研究室）

石造文化財の生物劣化に関して、劣化した石材（凝灰岩・砂岩・花崗岩）の微生物

V 研究活動及び事業

分析を実施した。

昭和46年に入手した新燻蒸剤バイケン（フッ化サルフリル）の協同研究で、微生物の殺菌効果を分担実施中。従来の市販の燻蒸剤より材質への影響の少ないこと、殺虫効果、木材への浸透性の優れていることが判明しているため、町田郷土資料館において文化財の被覆燻蒸を実施した。その他、燻蒸に関しては、春日大社の新収蔵庫において密閉燻蒸、高山族民俗資料の調査および減圧燻蒸を実施した。

遺跡については、受託による加曽利貝塚、中田横穴保存状態調査を継続して実施中であり、この間に、羽山装飾古墳、虎塚古墳、岩内山古墳においても保存科学的調査・研究に参加した。

鎌倉大仏のハトの被害が懸念されるので、現地調査の後、防除対策を提出した。

森 八郎（生物研究室）（非）

昭和48年度蟻害緊急調査事務連絡会議（文化庁建造物課主催）において、シロアリに関し地方文化財担当者に講演・指導した（48・5）。

当所において台湾高山族の民族資料の虫害調査及び燻蒸殺虫を行ない珍種マダラシミを同定した（48・7）。

新燻蒸剤弗化サルフリル（商品名バイケン）が浸透力、殺虫力、文化財材質への影響少の点で優れていることを確認し、わが国初めての被覆燻蒸を町田市郷土資料館において実施した（48・10）。

第1回アジア地域文化財保存修復研修コースにて、文化財における虫害の諸問題につき講演、デモンストレーションを行なった（49・2）。

慶応大学において行なわれた燻蒸法の実務講習会（社団法人日本しろあり対策協会主催）において、建造物の被覆燻蒸法に関し講演及び実務指導を行なった（49・3）。

D 主要研究業績

①：著書②：論文③：解説
④：研究発表⑤：講演・放送⑥：その他
（昭48.4～49.3）

登石 健三（保存科学部長）

- | | | |
|------------------------------|---------|-------|
| ②青銅器の科学的鑑識（共著） | 考古学雑誌59 | 48・12 |
| ②胡粉盛り上げ彩色の剥離 | 保存科学12 | 49・3 |
| ③特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」について | 保存科学12 | 49・3 |

⑤保存科学	昭和48年度文化財建造物修理主任技術者講習会	48・7
⑤文化財研究所の業務と鑑定	第四回鑑定技術研究会	49・2
⑤温湿度測定	第一回アジア地域文化財保存修復研修コース	49・2
⑥Art and archaeology technical abstracts — 抄録報告		
	ATA Abstracts	48

江本 義理 (化学研究室長)

②装飾古墳の保存科学	「装飾古墳と文様」古代史発掘 講談社	49・3
②障壁画彩色層の変質について	保存科学12	49・3
②障壁画の環境に及ぼす汚染空気の影響 (共著)	保存科学12	49・3
②彩色古墳：福岡県王塚古墳，熊本県チブサン古墳内の微生物調査 (共著)		
	保存科学12	49・3
④石造文化財における材質劣化の実例	第三回文化財保存科学研究協議会	48・9
④文化財の材質研究 鑑定に関連して	第四回鑑定技術研究会	49・2
⑤文化財の保存科学 自然保護・文化財保護シンポジウム	日本科学者会議	49・2
⑤文化財の材質判定 第一回アジア地域文化財保存修復研修コース		49・2
⑤空気汚染と文化財		49・2

見城 敏子 (化学研究室)

②漆塗膜に関する研究 (第3報)	色材協会誌	48・7
(漆塗膜の硬化および劣化過程の赤外吸収スペクトル変化および漆工品保存に関する考察)		
②にかわの劣化と顔料の変退色	保存科学12	49・3
④漆中の凝和物	第四回鑑定技術研究会	49・2

門倉 武夫 (化学研究室)

②障壁画の環境に及ぼす汚染空気の影響	保存科学12	49・3
--------------------	--------	------

V 研究活動及び事業

石川 陸郎 (物理研究室)

- ②青銅器の科学的鑑識 (共著) 考古学雑誌 59-3 48・12
 ②書院内の保存環境について 保存科学12 49・3
 ④日光東照宮陽明門両袖板壁唐油彩画のX線透視 美術部研究会 48・5
 ⑥国宝金銅壺鐙の科学的調査研究 宮地嶽古墳出土品修理報告書 43・9

新井 英夫 (生物研究室)

- ②中等生物教育における微生物 (共著) 日本細菌学雑誌 28-3 48・5
 ②町田郷土資料館におけるバイケン燻蒸 (共著) 保存科学12 49・3
 ②障壁画保存環境における微生物 保存科学12 49・3
 ②未発掘古墳の微生物学的研究 考古学雑誌 59-4 49・3
 ④石造文化財の生物劣化 第3回文化財保存科学研究協議会 48・9
 ⑤木材の生物劣化とその防除

昭和48年度文化財建造物修理主任技術者講習会 48・7

⑤Microorganisms in Cultural Properties

第1回アジア地域文化財保存修復研修コース 49・2

- ⑥紙本保存の手引 (監訳・共著) 日本博物館協会 48・4

森 八郎 (生物研究室) (非)

- ②Explanation and Evaluation of Two Electronic Termite Detectors,
 Comparing the Sonic Detector in Japan with the Physionics
 Termite Detector in America

Hiyoshi Science Review (Keio University) 11 48・9

- ②町田郷土資料館におけるバイケン燻蒸 (共著) 保存科学12 49・3
 ④国宝重要文化財建造物のシロアリ被害の緊急調査(静岡県) (共同研究発表)
 日本応用動物昆虫学会大会 48・4
 ⑤シロアリの話 慶応工学会 48・4
 ⑤シロアリの基礎知識と蟻害調査法および防除対策

昭和48年度蟻害緊急調査事務連絡会議(文化庁建造物課) 48・5

⑤シロアリの被害と対策	北海道建築指導センター講演会	48・5
⑤シロアリの恐怖	TBS	48・8
⑤シロアリ目下北上中	NHK	48・9
⑤木造建築物の虫害		48・9
第1回しろあり問題ゼミナール（日本しろあり対策協会）		48・9
⑤白蟻の生態と防除		
神奈川県職員（農業総合研究所・園芸試験場・病虫害防除所職員）研修会		48・11
⑤文化財における虫害の諸問題		
第1回アジア地域文化財保存修復研修コース		49・2
⑤燻蒸法燻蒸処理実務講習会（日本しろあり対策協会）		49・3
⑤しろありの昆虫学的知識および被害と探知		49・3
しろあり防除講習会（日本しろあり対策協会）		49・3
⑤シロアリ	環境衛生センター講習会	49・3
⑥紙本保存の手引（監訳・共著）	日本博物館協会	48・4
⑥シロアリ ペストコントロール 4（日本ペストコントロール協会）		48・6

E 科学研究費題目

（Ⅳ 予算2 科学研究費補助金交付決定額の項参照）

F 受託研究

〔Ⅰ〕 加曽利貝塚遺跡保存

前年度の予想の裏付けが実験的に確実に現われた。貝層断面の一部を仕切り実験コーナーとして空気湿度を上げているが、黴や藻類の繁殖を如何に防ぐかの問題が依然残っている。更に一ケ年、防黴剤を如何に適用するかを実験的に研究する。

〔Ⅱ〕 中田横穴保存状態調査研究

入口は硝子窓により仕切られているが、外気温は多少影響を及ぼすので、内部空間を通して季節により反転する水分の流れが生ずることが分かった。このため壁面のうち蒸発のおこる部分には蒸発期間の後には析出物が溜ること

になるが、その量は年々減少しているらしい。減少が事実とすれば工事による一時的流下物増加が析出を目立たせていたと考えられる。この確認のためもう一年研究を継続する。

〔Ⅲ〕 虎塚古墳石室彩色壁画保存のための調査研究

この古墳は発掘時に於いて開放以前の内部状態を調べる便宜を与えられた唯一のものであり、発掘以前の状態を知ることがよい保存状態を保つ上での重要な要素である。一度は発掘されたが、再び埋め戻されているので、引き続き調査研究し、元の状態を明らかにする計画で進めている。

(4) 修復技術部

昨年度まで保存科学部の一研究室であった修理技術研究室が、今年度から修復技術部として発展改組された。これは文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究とその公表を主務とする部で、保存科学部が、主に文化財の保全に係わる科学的分析研究を司る部であるのに対し、修復技術部は、老化破損し、あるいは後世の付加物のある文化財について、もとの正しい状態に修理し、あるいは復原する方法についての科学的、技術的研究を担当することとなる。研究対象としては、絵画、書跡、彫刻、工芸品、考古資料等は勿論木造建造物組物や細部に描かれた絵、石造建造物に及ぶ極めて広範囲の文化財があげられる。

部長一名が統宰し、第一修復技術研究室三名、第二修復技術研究室二名の人員構成により発足した。

第一修復技術研究室

木材および漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究とその結果の公表を主務とするが、現在は石、金属その他の材質のものも研究対象とされている。将来第三研究室開設が可能になった場合は、そこで、石、金属、土器、ガラス等の材質からなる文化財の研究が行なわれる予定である。

第二修復技術研究室

紙、布または皮革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表とを主務とする。

両研究室ともその研究内容は、有形文化財を構成している材料、構造、製作技法についての研究と、それらを修復するための伝統技術の整理大系化と科学的裏付け、そしてさらに科学的な材料、技法の修復への応用、開発のための臨床的な研究などからなるもので、とくに材質強化、補強、接合、剥落防止、朽損部充填等について、各種の合成樹脂の応用と技法の開発に主眼がおかれている。

それらの研究過程においては、保存科学部との共同研究が必要な部分もあり、また部内においても、一つの文化財が二つの研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く、それらについては両研究室員による共同作業によって研究が進められている。

A 研究・調査活動の概要 (昭48.4～昭49.3)

特別研究「書院等障壁画保存の科学的調査研究」は本年度、三ヶ年計画の研究を完了したが、当部も修理技術研究室時代に引続いてその研究を保存科学部と分担して実施しており、その成果は「保存科学」12号に発表した。

受託研究は、(1)紙本墨画作品のマジックインク汚損の除去法に関する研究、(2)三重県愛宕山古墳出土押出仏修復処置の研究、(3)洋犬図絵馬の汚損クリーニングの研究、(4)岩手県掘野古墳出土鉄手大刀の保存修復の研究、(5)黒漆塗鞍の居木一具の木質強化の研究、(6)京都東福寺三門天井彩色保存処置の研究などを実施した。詳細は受託研究の項に記すが、その内容は、紙本・板絵のクリーニング、彩色剥落止、漆芸品の材質強化、金属製品の強化補修等多岐にわたった。

その他の研究については、新設の修復技術部として、修復に関する研究の基礎資料の整理充実を目ざし、従来の実査記録等の整備蓄積を促進することに重点がおかれた。修復記録のカード化を目ざし、その記載様式を決め、カードを印刷したのもその一つであり、次年度から本格的な整備が開始される予定である。その他の各個研究要項は次に記す通りである。

B 研究題目

岩崎 友吉 (修復技術部長)

〔Ⅰ〕遺跡遺構の保存に関する研究

〔Ⅱ〕壁画の保存修復に関する研究

- 〔Ⅲ〕 絵画資材の研究
- 〔Ⅳ〕 古代ガラスの研究
- 〔Ⅴ〕 文化財保存修復に関する内外の術語集成
- 〔Ⅵ〕 文化財保存修復技術の国際基準に関する研究
- 〔Ⅶ〕 障壁画の保存修復に関する研究 (共) 特別研究

西川杏太郎 (第一修復技術研究室長)

〔Ⅰ〕 文化財の修復技術の調査研究

過去の修理記録および実査データに基づく修復技術の細部についての分析研究。主に伝統的技術を中心とし、これに科学技術がどのように応用され得るかを究明する。

〔Ⅱ〕 文化財の伝統的製作技法の研究 (特に彫刻について)

修復技術研究のために、作品がどのような材質を用いてどのように造られているかについての技法的研究。実査を混えた資料蒐集とデータの蓄積。

〔Ⅲ〕 木彫像の彩色技法の研究

上記の目的から、木彫像の表面に塗られている彩色の技法の実証的な研究。実査資料の整理蓄積。

〔Ⅳ〕 土中に埋もれていた押出仏の保存処置の研究 (共)

主に破片となって土中より取出された押出仏の復元に当って、他の伝世押出仏資料写真および技法研究文献を整理し、これを據り所として処置が適確に行なわれることを目的とした研究。

中里 寿克 (第一修復技術研究室)

〔Ⅰ〕 文化財の伝統的技法の調査及記録作製 (特に漆芸品、木工芸品について) 文化財の修復と保存の前提となる技法と施工工程を究明し体系化する。又材質及破損原因の究明も行う。

〔Ⅱ〕 平安鎌倉時代漆芸技法の実証的研究

主に平安鎌倉時代の漆芸品についてX線透視、実体顕微鏡等を用い材質、構造、施工法の調査研究を行う。

〔Ⅲ〕 障壁画の技法に関する研究（共）

特別研究「書院等障壁画保存の科学的調査研究」の一部を分担し、絵画技法等について調査し、結果をまとめる。

茂 木 曙 （第一修復技術研究室）

〔Ⅰ〕 文化財の科学的保存技術の実施研究

建造物及び美術工芸関係の彩色等の合成樹脂による保存のための技術的研究

〔Ⅱ〕 受託研究による文化財の科学的保存技術の実施研究

〔Ⅲ〕 特別研究「書院等障壁画保存の科学的調査研究」（共）

樋口 清治 （第二修復技術研究室長）

〔Ⅰ〕 紙本、絹本の保存処置に関する研究（共）

紙本のクリーニングの研究および絹本修理用補絹の電子線照射による劣化について。

〔Ⅱ〕 障壁画の剥落どめに関する研究

特別研究「書院等障壁画保存の科学的調査研究」の一部（共）

〔Ⅲ〕 出土遺物の保存処置の研究（共）

出土の丸木舟や金属製品などの修復処置

〔Ⅳ〕 木造文化財修理における合成樹脂の応用

腐朽木材の樹脂含浸強化、可塑性人工木材

〔Ⅴ〕 石造文化財修理における合成樹脂の応用

増田 勝彦 （第二修復技術研究室）

〔Ⅰ〕 文化財修復技法（特に装潢技術）の調査研究と記録作成

〔Ⅱ〕 打紙技法に関する研究

C 研究・調査活動（昭48.4～19.3）

岩崎 友吉 （修復技術部長）

高松塚古墳壁画の保存修復

V 研究活動及び事業

秋季開封に際し、イタリアから招致の壁画保存修復の専門家と共同作業を行い、壁画の危険な部分に対し応急的固定作業を行った。また実験室内で石灰を枯らす作業は続行中である。

窯跡保存処置指導

前年度より継続の美濃地方を中心とした窯跡保存作業の指導をおこなった。

防錆塗料の実験

鉄に対し二・三の防錆剤（スプレー）につき長期間経過後の効果を観察した。

浅草寺絵馬保存修復処置指導

丸木舟保存修復処置指導（県立竜ヶ崎第1高校）木彫彩色剥落どめ調査（増上寺）

障壁画保存状態調査（天球院、東福寺、大樹寺）東南アジア留学生に対する講義

（ユネスコ、アジア文化センター）国際保存センター第7回総会および第20、21回理事會に政府代表として出席した。

西川杏太郎（第一修復技術研究室長）

三重県津市古墳内の土に埋もれた押出仏の保存処置（受託研究）に際して、伝世現存の押出仏資料および写真、文献の蒐集整理を行ない（48・8）処置作業時の参考に供し、処置終了時の色合せ仕上に際して美術的な立場からの検討を行なった。

文化財の修復記録を統一した書式で、整理しカード化するための記載要項の検討作成（共）を行なった。（48・10）

福島市教育委員会からの要請で、同市岩谷磨崖仏の保存修復のための事前調査を実施した。これは自然の岩山に刻まれた仏像であり、事前に、地学的調査、岩山の排水機構についての調査・年間を通じての気象条件の測定等を十分に行なった上で、修復を行なうべき事、また処置は、岩の亀裂接合にエポキシ樹脂グラウト工法、岩表面の剥落防止にエチルシリケート含浸が有効であることを指導した。（樋口室長と共同調査、48・12）

彫刻の製作技法研究については、京都周辺および山陰地方の実査を行ない、既に実査の済んでいる物件については、資料整理、図化等を実施した。（48・7～49・3）

中里 寿克（第一修復技術研究室）

受託研究

「押出仏修復」に関しては樋口技官と三重県津市博物館に赴き、運搬の為の補強処置を行い、アトリエに搬入後、処置施工。「黒漆居木の強化処置」に関しては、PSNY 6 による木質強化を行ない、可塑性人工木材、木屎等による塗漆膜の補修を行った。

特別研究

1 月末に智積院、養源院、天球院、大樹寺を調査。3 ヶ年の調査結果を保存科学12 号にまとめた。

漆芸品の調査

中尊寺清衝、秀衝金棺を調査。東博蔵鳳凰円文螺鈿唐櫃、藤田美術館蔵蒔絵手箱、東博蔵推朱類等を調査。

その他

宮内庁乾門修理に関し、樋口技官と木部補填処置について指導した（11月）。福島県中田横穴、清戸迫古墳を調査（7月）。茨城県立竜ヶ崎高校蔵丸木船の保存処置を共同で行った。

戊 木 曜 （第一修復技術研究室）

受託研究による東福寺三門天井彩色の保存処置法の研究を行なった。

特別研究の担当部門に当たる書院造り等、障壁画の合成樹脂等による剥落どめ処置後の経年変化、損傷の現状等の調査を行なった。

樋口 清治 （第二修復技術研究室長）

第一修復技術研究室に協力して、受託研究三重県津市出土の押出仏の保存処置を実施した。これは銅板がほとんど錆びて消滅し、金箔のみ、または痕跡だけになった押出伝を、合成樹脂処置を施して土塊より分離し、陳列可能なまでに修復するものであるが、この処置は技術的に初めての試みで困難をきわめており、次年度に続行する予定である。この他紙本のマジックインキ汚損の処置を検討した。また二戸市出土の「蔵手大刀」の修復処置をおこない、刀身と鞘を分離して保存することができた。

韓国中央博物館へ出張し、武寧王陵出土の木製品の保存状態および保存処置に関して調査した。（48・9）

V 研究活動及び事業

茨城県竜ヶ崎市出土丸木舟の修復処置を指導した。これは出土後自然乾燥して収縮、変形して一部崩壊したものをイソシアネートの含浸強化、アラルダイト S V 426 の充填、接着で整形して修復したが、結果は良好であった。また宮内省乾門修理に際して人工木材の応用を指導した。

増田 勝彦 (第二修復技術研究室)

泥間似合紙に描かれた水墨画上にマジックインキで落書されたものの溶出試験を受託研究により行った。(48・9)

酒井抱一筆洋犬図絵馬のクリーニングを受託研究により行った。(43・10)

打紙技法としての箔打紙製作工程を金沢の箔打職工場で調査・記録した。(48・10)

D 主要研究業績 (①: 著書 ②: 論文 ③: 解説 ④: 研究発表 ⑤: 講演放送 ⑥: その他) 昭和48・4～昭和49・3

岩崎 友吉 (修復技術部長)

①標本類の保存	自然史博物館の収集活動	48・6
②障壁画の剥落どめについて	保存科学12	49・3
②文化財保存修復における二三の根本問題	保存科学13	49・3
②修復技術部における保存修復記録カード作成について	保存科学13	49・3
③文化財保存に関する用語をめぐる	博物館ニュース(日博協)	48・6
③「保存」という用語について	博物館ニュース(日博協)	48・7
⑤石造文化財保存に関する外国の事例	文化財保存科学研究協議会	48・9
⑤史料の保存科学	国立史料館講習会	48・9
⑤仏像復活	NHKT V	49・2
⑤文化財保存修復における根本方針		
	ユネスコ・アジア文化センター研修コース	49・1
⑤考古学遺跡の保存修復	ユネスコ・アジア文化センター研修コース	49・2
⑤文化財のクリーニング	ユネスコ・アジア文化センター研修コース	49・2
⑤文化財の材質と損壊	ユネスコ・アジア文化センター研修コース	49・2

西川杏太郎 (第一修復技術研究室長)

- ②彫像の玉眼法について 仏教芸術91 48・4
- ①木彫像Ⅱ<「重要文化財」2(共編)> 毎日新聞 48・5
- ①日本彫刻史基礎資料集成 重要作品篇1(共編) 中央公論美術出版 48・7
- ⑤古美術品の梱包技術 日通美術梱包職員研修会 48・7
- ⑤伝統技法と科学技術 第18回文化庁修理技術者(美術工芸品)講習会 48・10
- ⑤文化財複製(みんなの科学) NHKTV 48・11
- ⑤舞楽面とその遺品 開所記念講演会 48・11
- ⑤彫刻のみかたについて(鎌倉地方彫刻を中心に)
神奈川県文化財保護推進研究大会 48・11
- ⑤日本彫刻の特徴と修復技術
第一回ユネスコアジア地域文化財保存修復研修コース 49・1
- ②仏像修復技術研究序説Ⅰ 保存科学13 49・3

中里 寿克 (第一修復技術研究室)

- ②科学処理一遺材処理の実際 重文法隆寺羅漢堂復原工事報告書 48・12
- ②京都寺院障壁画彩色の現状 保存科学12 49・3
- ②建造物等彩色保存処置一覧(共) 保存科学13 49・3
- ②重文新潟県議会旧議事堂中心飾りの保存処置(共) 保存科学13 49・3
- ②中尊寺金色堂漆芸部材の修復(下) 保存科学13 49・3
- ⑤日本の木漆工技法と修復技術
ユネスコアジア地域文化財保存修復研修コース 49・2

茂木 曙 (第一修復技術研究室)

- ②書院造り建造物中の障壁画に対する合成樹脂等による剥落どめ処置歴及び現状
保存科学12 49・3
- ②重要民俗資料荒川神社及び白山媛神社船絵馬保存処置 保存科学13 49・3

V 研究活動及び事業

樋口 清治 (第二修復技術研究室長)

- ②障壁画の合成樹脂による剥落どめ処置の問題点 保存科学12 49・3
- ②観音山古墳出土鉄器の保存処置について (共) 保存科学13 49・3
- ②重要文化財新潟県議会旧議事堂中心飾りの保存処置 (共)
保存科学13 49・3
- ②鉄錆に埋没した銀象嵌の露出処置 (共) 保存科学13 49・3
- ④石造文化財修復における合成樹脂の応用 文化財保存科学研究協議会 48・9
- ⑤建築素材の化学的補修材料について
48年度文化財建造物修理主任技術者講習会 48・7
- ⑤金属と石の修理 第18回文化庁修理技術者(美術工芸品)養成講習会 48・10
- ⑤出土品の保存技術 アジア地域文化財保存修復研修コース 49・2
- ⑤修復材料一主として文化財修理における合成樹脂の応用について
アジア地域文化財保存修復研修コース 49・2

増田 勝彦 (第二修復技術研究室)

- ⑥マジックインキ汚損のクリーニング試験報告 (共) 受託研究報告書 49・3

E 科学研究費題目

(本年度科学研究費補助金交付なし)

F 受託研究

- 〔I〕 紙本墨画作品のマジックインク汚損の除去に関する研究 (香川, 妙法寺)

前年度の研究によって提起された余白部への再染着の問題は、活性白土の使用によって解決した。しかし本紙と同種の泥間似合紙のマジックインキについては、紙中に抄き込まれた泥土が原因で、他の紙と同様の溶出効果をあげることは出来ないことを確認した。

〔Ⅱ〕 出土押出仏修復保存処置に関する研究

(三重県立博物館保管)

三重県津市内の古墳の床土に圧着し埋もれた状態のまゝ出土した押出仏で、銅板は大方腐朽粉化し、鍍金のみ、土に印象された仏像の表面に付着している状態のもの、裏返しの状態のもの等が見られた。処置は押出仏面を清掃し、そこにアクリル樹脂を厚くかけて補強し、次に土中より剥ぎとり、他の面の土を除去してそこに寒天を流して固定し、次にこれを容器に入れてアクリルを溶解し、露出した押出仏の裏面を最終的にエポキシ樹脂で補強するものである。押出仏は土塊表面にみる4枚のほか、土塊中より新たに大小6枚の押出仏が発見された。来年度残余の処置を行なう予定である。

〔Ⅲ〕 洋犬図絵馬の汚損クリーニングに関する研究

(東京、総持寺)

画面全体にわたる長期間の燻煙による汚れと、昭和41年の火災時に受けた消火液の流下跡のクリーニング、並に彩色層に見られる剥離部に対する剥落止め処置を行った。水溶性の汚れを和紙の水張りによって溶出吸着させ、剥落止めにはアクリルエマルジョンを使用した。

〔Ⅳ〕 蕨手大刀の保存修復の研究

(岩手県二戸市教育委員会保管)

この蕨手大刀は、岩手県二戸市堀野古墳出土のもので、錆による損傷甚だしく、崩壊寸前の状態であった。残存する鞘の木質部はウオッシュコートを含浸で強化した後、全体をMV・1の減圧含浸で強化した。型取り樹脂で刀身を型取りして、樹脂模造を造り、それに鞘の木質部分を着せ、考古学的見地から修復した。鞘の内側に残っていた痕跡により、錆のため部分的に崩壊して不明であった刀身の長さを復原することができた。

〔Ⅴ〕 黒漆塗鞍の居木二枚一具の木質強化処置に関する研究

(茨城、鹿島神宮)

この鹿島神宮蔵の黒漆居木は重文梅竹時絵鞍と一具をなすものと考えられるものであるが、全面に虫蝕朽損が甚だしく海綿状となり塗漆の剥離も生じているので、現状保存を目的とする木質の強化と漆膜の保存処置を行った。処置はまずPSNY6を全体に塗布含浸して固化させた後、可塑性人工木材、木屑等を用いて浮上った漆膜を接着した。漆膜欠損部は木屑及漆下地をもって充填した。

V 研究活動及び事業

〔VI〕 国宝東福寺三門天井絵彩色保存処置の研究

(京都、東福寺)

三門内部彩色の保存処置としては、同門の修復のための解体前、昭和41～43年度に応急的に実施している。今回解体を終り組上げ前に本格的な保存処置を行なおうとするもので、その処置法の研究を行なった。その結果紙の剥離に対してはペースト状のアクリル変性酢酸ビニール樹脂を主に、顔料の剥離に対しては、アクリルエマルジョンを使用して接着することが適当と判断された。その処法に基いて、来年度には現場事務所の手で全体に亘っての保存処置が行なわれる予定である。

2. 事業

(1) 出版

A 美術研究

昭和7年1月創刊、昭和48年3月286号を発行。当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌。主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し、ときに所外研究者の寄稿を受けることもある。A4版、各号本文42頁、原色図版1、単色図版8、各年度6冊刊行。

昭和48年度（第287号～第292号）「美術研究」所載の論文等の題目は次のとおりである。

美術研究 287号 昭和48年5月

<論文>

紀三井寺護国院と観心寺の観音立像

猪川 和子

仲猷祖闢・無逸克勤の来朝とその著賛作品

海老根聡郎

<研究資料>

吉田忠氏蔵古写本『こわたの時雨』公刊 下

田村 悦子

美術研究 288号 昭和48年7月

<論文>

御物 伏見天皇宸翰伊勢物語について 一原家旧蔵伊勢物語絵巻

- の断簡— 田村 悦子
隋造像様式成立考 —とくに北周焼仏と関連して— 松原 三郎
- <図版解説>
- 亜欧堂田善作「西洋公園図」とジャック・リゴー原画「フォンテ
ーヌブロー宮」の銅版画 陰里 鉄郎
- <研究資料>
- 蘆雪翁追薦展観画録 河野 元昭
美術研究289号 昭和48年9月
- <論文>
- 宇佐神宮の神輿障子絵について 関口 正之
『平治物語』諸本中における平治物語絵巻の位置 宮 次 男
美術研究290号 昭和48年11月
- <論文>
- 渡辺始興筆「真写鳥類図巻」について(上) 河野 元昭
荻原守衛(中)五 —その生涯と芸術— 中村傳三郎
萬 鐵五郎(五) —生涯と芸術— 陰里 鉄郎
美術研究291号 昭和49年1月
- <論文>
- 中部地方の古代銅像 久 野 健
渡辺始興筆「真写鳥類図巻」について(下) 河野 元昭
上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 上
—伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告六— 神谷 栄子
美術研究292号 昭和49年3月
- <論文>
- アスタナ出土の伏羲女媧図について(上) 上野 アキ
『鳥獣戯画』甲巻の復原 上野 憲示
- <図版解説>
- 「鳥獣戯画」甲巻の残欠二種 —新出本と益田家旧蔵本— 秋山 光和

V 研究活動及び事業

B 日本美術年鑑

昭和11年10月創刊，毎年1冊（ただし昭和19年～21年版および昭和22年～26年版は各1冊）出版し，昭和49年3月昭和48年版を刊行した。内容は，毎年1月から12月までのわが国美術界の活動・状況を記録するもので，美術界年史・展覧会・物故者略歴・雑誌単行図書美術文献目録等を収録している。所内研究員の調査，執筆による。

C 芸能の科学5 （芸能論考3） 昭和49年1月

境の芸能	仲井幸二郎
小地域における民俗芸能の伝播と分布	
—長野県飯田地方の練り獅子を中心に—	三隅 治雄
能における「越天楽今様」の撰取	横道 萬里雄
絢交ぜと世界	浦山 政雄
神名帳 —その性格と構成—	佐藤 道子

D 保存科学

保存科学第12号 昭和49年3月

特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」について	登石 健三
書院内の保存環境について	石川 陸郎
障壁画の環境に及ぼす汚染空気の影響	門倉 武夫・江本 義理
障壁画保存環境の微生物	新井 英夫
京都寺院障壁画彩色の現状	中里 寿克
書院造り建造物中の障壁画に対する合成樹脂等による剥落どめ処置及び現状	茂木 曙
障壁画等の剥落どめについて	岩崎 友吉
障壁画の合成樹脂による剥落どめ処置の問題点	樋口 清治
胡粉盛り上げ彩色の剥離	登石 健三
障壁画彩色層の変質について	江本 義理

にかわの劣化と顔料の変褐色

見城 敏子

装飾古墳，福岡県王塚古墳，熊本県チブサン古墳内の微生物調査

江本 義数・江本 義理

町田郷土資料館におけるバイケン燻蒸

森 八郎・新井 英夫

保存科学 第13号 昭和49年3月

文化財保存修復に於ける二三の根本的問題

岩崎 友吉

重要民族資料 荒川神所船絵馬及白山媛神社船絵馬保存処置

受託研究報告第30号

茂 木 曙

重要文化財新潟県議会旧議事堂中心飾りの保存処置

受託研究報告第31号

樋口 清治・中里 寿克

観音山古墳出土金属製品の保存処置について

受託研究報告第32号

樋口 清治・中里 寿克

金属製品のクリーニングにおけるエアブラッシュの応用

一鉄錆で隠された銀象嵌の露出処置

樋口 清治・青木 繁夫

中尊寺金色堂漆芸部材の修復（下）

中里 寿克

彫刻修復技術研究序説 一伝統技法と科学技術一

西川杏太郎

建造物等の修復における合成樹脂処置一覧

岩崎 友吉・中里 寿克

修復技術部における保存修復記録カードの作成について

岩崎 友吉

E その他の出版物

美術部

支那古版画図録

（美術研究資料第1輯）

昭和7

吉備大臣入唐絵図

（同 第2輯）

同 9

徽宗摹張萱搗練図

（同 第3輯）

同 10

鳳凰堂雲中供養仏

（同 第4輯）

同 11

桃山時代金碧障壁画

（同 第5輯）

同 12

V 研究活動及び事業

富貴寺壁画	(同	第 6 輯)	同	13
印度及南部アジア美術資料	(同	第 7 輯)	同	14
光悦色紙帖	(同	第 8 輯)	同	14
菱田春草	(同	第 9 輯)	同	15
能恵法師絵詞	(同	第10輯)	同	16
宮素然筆明妃出塞図巻	(同	第11輯)	同	16
日本美術資料		第 1 輯	同	13
同		第 2 輯	同	14
同		第 3 輯	同	15
日本美術資料		第 4 輯	昭和16	
同		第 5 輯	同	17
近代日本美術資料		第 1 輯	同	23
同		第 2 輯	同	24
同		第 3 輯	同	26
墨跡資料集		第 1 輯	同	24
同		第 2 輯	同	24
同		第 3 輯	同	26
源氏物語絵巻			同	24
黒田清輝素描集			同	24
栄山寺八角堂			同	25
栄山寺八角堂の研究			同	26
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究			同	28
黒田清輝作品集			同	29
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで		同	16
同	続編 昭和11年～同20年		同	23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年		同	29
美術研究索引	第 1 号～第 100 号		同	16
美術研究総目録	第 1 号～第 230 号		同	40
高雄曼荼羅			同	41

東洋美術文献目録 明治以降昭和10年まで（再刊） 同 42

日本東洋古美術文献目録 昭和11年～同40年 同 44

はかに科学研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷 美術研究所編	便利堂	同 32
醍醐寺五重塔の壁画 高田 修編	吉川弘文館	同 34
平安時代世俗画の研究 秋山光和著	同	同 39
近代日本美術の研究 隅元謙次郎著	大蔵省印刷局	昭和39
黒田清輝 同	日本経済新聞社	同 41

芸 能 部

標準日本舞蹈譜 昭和35

音盤目録Ⅰ 同 40

芸能の科学1 一芸能資料集1 一四世鶴屋南北作者年表 同 41

芸能の科学2 一芸能資料集2 一鮫の神楽台本集成 同 41

音盤目録Ⅱ 同 45

東大寺二月堂 観音悔過（お水取り）

東京国立文化財研究所芸能部監修 ビクターレコード 同 47

芸能の科学3 一芸能論考1

東京国立文化財研究所芸能部編 平凡社 同 47

芸能の科学4 一芸能資料集3

東京国立文化財研究所芸能部編 平凡社 同 48

保存科学部（受託研究報告）

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剥落どめ他18件 昭和35～昭和42。

(2) 公開学術講座

美術部

昭和48年10月27日(土) 13.30~16.30

於日本経済新聞社小ホール

1 藤原時代の彫刻

猪川 和子

藤原時代彫刻の主要な基準作を、まず中央作を尊像別に年代順に配列し、その展開のあとを整理した。とくに四天王像において、円教寺、禅定寺、善水寺、法隆寺等の十世紀基準作例に共通する形制上の一種の完成、すなわち和様化について指摘し、作家と願主、作品の形制の関連について考察した。また、藤原時代の地方作の、材質、技法の異なる諸作例をあげ、さらに最近新発見の胎内墨書銘等の紹介を、スライドを用いて行った。

2 明治宮殿杉戸絵について

関 千代

明治宮殿杉戸絵については、さきに「美術研究」(264号)にその調査報告を発表した。その際、杉戸絵の制作に関連して、明治前期における日本画界の概要について述べた。しかし、公開講座では、その後の研究と資料発見によって、日本画界の状況についてかなりの具体性をもって新事実を明らかにすることが出来た。即ち、大規模な横国博への政府参同と、それにより齎らされた明治美術への影響、強力な日本美術復興の気運、1882、1884両年に開催された初の政府主催絵画共進会の洋画不参加と杉戸絵制作事業の関連等がその主な内容である。なお、杉戸絵については、未公開のカラー・スライド80余枚を使用し、紹介した。

芸能部

昭和48年12月6日(木) 18・00~20・40

於 朝日講堂

「歌舞伎の技法」

1 見得の構造

芸能部長 浦山 政雄

(1) 見得の意義：歌舞伎美の強調とその方法

(2) 見得の発生：元禄歌舞伎における荒事を中心に

- (3) 脚本に見られる見得：江戸・大阪・世話・時代・歌舞伎十八番物等による比較
- (4) 見得ときまり：その性格の異同
- (5) 見得の分類：人数・方向・姿勢・舞台状況による分類
- (6) 特殊な見得：石投げの見得・不動の見得・元禄見得・その他
- (7) 見得の技法：時代・世話・役柄・狂言の様式による相違

2 映画 「近江源氏先陣館」

盛綱陣屋の場

(3) 開所記念行事

昭和48年度（美術・芸能・修復技術部）

昭和48年11月17日13.00～16.15、国立西洋美術館講堂において「舞楽」に関する講演と映画の会を開催した。

1 舞楽面とその遺品 修復技術部第一修復技術研究室長 西川杏太郎

1. 舞楽の源流

朝鮮半島系 — 新羅楽，百濟楽，高麗楽

中国大陸系 — 唐楽

南方系 — 度羅楽，林邑楽

北方系 — 渤海楽

など舶来の楽舞に日本在来の楽舞 — 久米舞，楯臥舞，諸県舞，筑紫舞などが加わり，内容の整理が行われ，王朝風の完成形態が作り上げられたとされる。

2. 舞楽面遺品の盛期 — 平安時代～鎌倉前期

3. 舞楽の地方普及と舞楽面の遺品

4. 舞楽面の形の特色（伎楽面，能面との比較）

5. 舞楽面の種類（現存のもの）

きとく 貴徳	高麗，右	きとくこいくち 貴徳 鯉口・番子	ばんこ 高麗，右	なそり 納曾利	高麗，右
	1		1，番子2～6		2
ちきゅう 地久	高麗，右				
	4～6				

その他 古鳥蘇 高麗, 右 進宿徳 高麗, 右 菩薩 唐

そまくしや 蘇莫者 唐, 左 師子 唐, 左 わらべまい 童舞

りようおう 陵王 唐, 左 1 あま 摩唐, 左 2 二の舞 唐, 左 2 じんろう 秦王 唐, 左 4

さんじゆ 散手 唐, 左 1 ごおんじゆ 胡飲酒 唐, 左 1 さいそうろう 採桑老 唐, 左 1 ばとう 扳頭 唐, 左 1

げんじようらく 還城楽 唐, 右 1 しんとりそ 新鳥蘇 高麗, 右 4~6 たいしようとく 退宿徳 高麗, 右 4~6

あやきり 綾切 高麗, 右 4 ごとくらい 胡徳楽 高麗, 右 6 せつせん 石川 高麗, 右 4 ころばせ 毘八仙 高麗, 右 4

2. 舞楽装束とその遺品

美術部主任研究官 田實 榮子

一 芸能服飾の特徴, 舞楽装束の特徴

二 舞楽装束概観

(イ) 舞楽装束の特性

(ロ) 左右の別

(ハ) 形態上の種類

常装束

蛸絵装束

襦袢装束

三 舞楽装束の遺品

(イ) 遺品資料の主なもの

(ロ) 遺品資料を通して窺われること

(以上を具体例を引きながら説明, スライド使用, 所要時間約35分)

尚, 映画「万歳楽」の前半は装束着がサイレントで行われており解説を必要としたため, 装束の名称や着装に関する説明を田實が担当した。

3. 舞楽の楽曲構成

芸能部音楽舞踊研究室長 横道 萬里雄

(1) 唐楽と高麗楽 その楽器編成と各楽器の特色。

(2) 左舞と右舞 その伴奏曲としての唐楽・高麗楽との関係。

(3) 唐楽伴奏の舞曲構成 前奏曲・登場曲・間奏曲の各種。当曲と借用曲。退場曲の各種。

- (4) 高麗楽伴奏の舞曲構成 同上。
- (5) 当曲の構成 序破急等について
- (6) 無拍節曲等の合奏法 序吹き・退り吹き・追イ吹き。
- (7) 有拍節曲の拍節法 延拍子・早拍子・只拍子・八多良拍子。
- (8) 舞の部分構造 出手・乱序・入手・入綾・詠・囃。
- (9) 舞の動作単元 摺・披・立・踏・突・踊・伏・打入・指肘・見。

(4) 国際国内関係

美術部

国際関係としては、美術部の出版物、研究資料など各国との交換が盛んに行われ、また、外国の研究者で当研究所の研究員の指導をうけ、資料を利用して研究する者も多かった。海外出張による調査研究については、陰里鉄郎第二研究室員が近世・近代日本洋風美術と西洋美術との関係について調査研究のため、文部省在外研究員として久野健が48年10月1日より11月30日までアメリカ合衆国連合王国、フランス、イタリア、ギリシャ、タイへ出張し、在外日本及び東洋彫刻の調査研究を行った。

国内における活動については前記各項に記されている如くであるが、学会関係として特に美術史学会、美学会などと接触を密にし、多くの寄与をなした。

芸能部

日本演劇学会・東洋音楽学会・歌謡学会・中世文学会・近世文学会・日本民俗学会等に研究員が参加し、交流を行なった。

保存科学部・修復技術部

先年度より継続して、韓国よりの2名の研修員が48年4月まで滞在した。又メキシコ文化博物館修理課長も本年度初めまで研修の継続で止った。

4月修復技術部岩崎室長が国際保存センター総会および理事会に出席のためローマに出張した。

中華人民共和国出土文物展が東京国立博物館で開催されるにつき、5月工作組員数

V 研究活動及び事業

名が来訪、二部の業務・施設等を紹介した。又6月には文物事業管理局長王治秋氏外13名の来訪があった。9月には出版印刷代表団の高女史の来訪を受けた。

48年9月修復技術部樋口室長は武寧王陵出土木製品の保存処置調査助言の為、京都国立博物館の併任となって韓国へ出張した。

9月西独バイエルン州文化財鑑査官タウベルト氏が国立西洋美術館により招聘され、当所へ来訪、保存修復に関連する懇談を行なった。

イタリアの壁画修復の権威者モーラ氏の一行が高松塚保存に関して10月来日、研究所を訪問、施設を紹介した。

その他個人的な来訪者としてアメリカのメイヤー氏(11月)、台湾の張氏(12月)がある。モナリザ展の準備打合わせの為に来日したフランス代表者のうちウール女史が12月来所、二部の施設を紹介した。

ユネスコによるアジア地域文化財保存修復研修コースが49年1月より始まり、両部より合計8名が講義を行なった。又研修員4名のうち2名、フィリピンのノリエガ女史、タイのパイラタナ女史は実地研修を当所で行なうこととなり、二部の全員がこれに当った。この研修は49年度にまたがって半年間行なわれる。

48年7月、昭和48年度文化財建造物修理主任技術者講習会が国立赤城青年の家で開催され、登石保存科学部長(保存科学)、新井技官(木材の生物劣化とその防除)、樋口修復技術部第2研究室長(建造物修理における合成樹脂の応用)が講師として講義を行なった。

48年10月修理技術者(美術工芸品)講習会に修復技術部西川(修復技術—伝統技法と科学技術)、樋口(合成樹脂による金属および石造文化財の保存と修復技術について)両室長が講師を勤めた。

昭和48年9月20日当所別館会議室で、第3回文化財保存科学研究協議会を開催、文化庁文化財保護部長、記念物課担当官、美術工芸課・建造物課の課長及び担当官、東京国立博物館、東京芸術大学その他関係専門家の出席を得て、「石造文化財の保存修復」に関して研究協議を行ない、大きい成果を得た。

昭和49年2月28日には、同じく別館会議室で文化財保存科学懇談会(第4回)を開催、文化庁文化財保護部長、鑑査官をはじめ記念物課担当官、美術工芸課・建造物課の課長並びに担当官の出席を得て、昭和48年度調査研究概要、昭和49年度調査研究計

画概要，国際保存センターに関する事項，国内外からの研修員・研修生の受入れ等の報告を行ない，昭和49年度特別研究，昭和49年度受託研究，昭和49年度保存科学シンポジウム，研究テーマ選択の方向，その他につき懇談し，意見交換を行なった。

VI 研究施設・設備

1 蔵 書

美 術 部

東洋古美術 近代日本美術 西洋美術関係を主として、和漢（26669）洋書（3545）を合わせて、30,214冊、ほかに美術関係雑誌、売立目録類及び拓本がある。

芸 能 部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書3,661冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌、丸本・謄本等の台本も収集している。

保存科学部・修復技術部

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理報告書、調査報告書、及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて1,612冊を収集している。

昭和47・48年度の新蔵書数は次のとおりである。

区 分	美 術 部		芸 能 部		保存科学部・修復技術部		計
	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	
昭和47年度	473 冊	25 冊	123 冊	—	29 冊	12 冊	662 冊
昭和48年度	591 "	38 "	212 "	—	48 "	27 "	896 冊

2 資 料

美 術 部

主として写真による美術研究資料であるが、その収集の目的は、内外の資料をあまねく収集・整理・保管して、その完璧な収集箇所として美術の研究に資することである。この趣旨に基づいて設立当初から写真撮影による資料の作成をはじめ、印刷物を

整理してこれに加える等その収集につとめている。資料の内容は、日本美術・東洋美術・西洋美術および明治・大正美術に大別し、さらにこれを絵画・彫刻・工芸・建築等に分類整理している。その数は特別大型のものから小型のものまで、約13万余。写真資料のほかに印譜・図版カード等がある。

芸 能 部

レコード・録音テープ・写真（8ミリ・16ミリシネを含む）等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって刊行された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録音テープ	シネフィルム		写 真
			8 ㎜	16 ㎜	
昭和47年度	5,815 枚	1,650 本	141 本	3 本	多 数
昭和48年度	245 枚	90 本	27 本	0	多 数
計	6,060 枚	1,740 本	168 本	3 本	多 数

3 機器・設備

美 術 部

光学的研究設備

光学的鑑識法を東洋古美術品の研究に応用することは当研究所において既に戦前から企画されていたが、昭和27年度にはそれまでの予備的研究成果と海外における研究設備を参考とし、科学研究費（機関研究）の交付を受けて本格的な設備を整えるにいたった。その後も技術的な進歩に即応して新規の装置を加え、美術史学の実証的研究

VI 研究施設・設備

に多大の貢献をしている。現在の主要設備を類別すると次のとおりである。

I X線透過撮影装置

- | | |
|----------------------|----|
| (1) 可搬式白色X線装置 | 1式 |
| (2) 可搬式ソフテックス装置(J型) | 1式 |
| (3) 可搬式ソフテックス装置(新J型) | 1式 |
| (4) 携帯用ソフテックス装置(E型) | 1式 |

II 紫外線照射装置

- | | |
|-----------------------------------|----|
| (1) 固定式照射装置 | 2台 |
| (2) 可搬式照射装置(フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス) | 2台 |
| (3) 携帯用紫外線検査器 | 1台 |

III ナトリウムランプ照射装置

2台

IV 赤外線暗視装置及び間接撮影装置

V 顕微鏡装置

- | | |
|---|----|
| (1) 双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置 | 1式 |
| (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置(可動支持台及び携帯用スタンド) | 1式 |
| (3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置 | 1式 |

IV マイクロ写真関係設備

- | | |
|----------------------------|----|
| (1) マイクロ写真撮影装置 | 1式 |
| (付自動現像機, プリンター, 引伸機, 乾燥機等) | |
| (2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置 | 1式 |
| (3) マイクロ読取機(ルーモ社製) | 3台 |
| (4) リーダープリンター | 1台 |

芸 能 部

各種伝統芸能の記録及び分析研究のための設備・機器を所有する。

I 設 備

録音室(遮音壁を備える)・調整室・視聴室(舞台を備える)・資料室・図書室

II 機 器

ピッチレコーダー	1 台
テープレコーダー	13 台
ビデオテープレコーダー	1 台
16mm 撮影機	1 台
16mm 映写機	1 台
8 mm 撮影機	4 台
8 mm 映写機	2 台
35mm 写真機	5 台
35mm マイクロフィルム解読装置	1 台
16mm シネフィルム分析装置	1 台
ステレオ音声調整卓	1 台
スピーカー	4 台
スタジオ用照明器具	1 式

保存科学部・修復技術部

主な研究設備

装 置 名	説明, 目的, 性能等	数 量
走査型電子顕微鏡 (J S M-50 A 型)		1
恒温恒湿槽	0°~40 °C 20~90 %	1
サンシャインウェザーメーター	劣化促進試験機	1
真空凍結乾燥装置		1
紙耐揉強度試験機		1
光電分光光度計	自記	1
発光分光分析装置		1
蛍光 X 線分析装置	標準型及び非破壊用大型試料台つき	1
可搬式蛍光 X 線分析装置	現場可搬用	1
X 線回折装置およびデバイ		
シェラーカメラ, ラウエカメラ	結晶同定	1

VI 研究施設・設備

X線発生装置	中間硬度	1
真空蒸着装置	表面薄膜形成	1
金属顕微鏡		1
生物顕微鏡		2
表面アラサ顕微鏡		1
万能顕微鏡		1
Co-60 γ 線線源	透視用3c及び0.2c	2
ガイガー・ミュラー計数装置	放射線測定	1
自記分光放射計	光の分光測定	1
ガスクロマトグラフ	ガス分析	1
(水素イオン化検出器・熱伝導検出器・熱分解装置付)		
回折格子自記赤外分光光度計		1
”	赤外顕微鏡 他上記機械附属	1
引張試験機	5 kg	1
自動記録式示差熱天秤		1
炭素・水素・窒素分析計		1
減圧含浸装置		1
減圧殺虫装置		1
超低温槽	-50℃	1
冷却遠心機	-5℃~5℃	1
粒度分布測定装置		1
熱膨張計		1
レオメーター	粘性試験用	1
直読式動的粘弾性測定器		1
ライトガイドカラーメーター	色彩測定	1
工業用X線発生装置	200 KVP, 8 mA	1
万能試験機(島津, オートグラフ)	インストロン型, 10トン	1

文化財の特殊性として、材質の劣化現象究明のための試験機類、非破壊の方法による材質調査のための分析機器類、及び微量試料の分析、調査などに用いる顕微鏡類な

どである。

4 黒田記念室

記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、黒田清輝の油絵・素描・画架を陳列している。

収蔵されているものは、油絵 125 点・素描 170 点・スケッチブック等若干である。これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、樺山愛輔・黒田照子、田中良氏等からの寄贈もふくまれており、随時陳列替を行なっている。毎週木曜日午後 1 時から 4 時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。

黒田子爵記念室観覧規程

第 1 条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第 2 条 観覧は無料とする。

第 3 条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第 4 条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第 5 条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 1 陳列品に手を触れること。
- 2 インク・墨汁等を使用すること。
- 3 飲食及び喫煙をなすこと。

第 6 条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第 7 条 観覧の日時は毎週木曜日午後 1 時から同 4 時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝 日

開所記念日（10月18日）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。
但しこの場合は予め掲示する。

5 閱 覧 室

本研究所美術部の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の閲覧者数は、延 1,000 名程度である。

Ⅶ 職 員

1 現 職 員

昭和49年 3月30日現在

所 属	官 職 名	氏 名	入所年月日
庶 務 課	所 長	関 野 克	昭 27. 4. 1
	課 長	鬼 山 光 義	45. 4. 1
	課 長 補 佐	五十嵐 春 雄	47. 4. 1
	庶 務 係	羽 田 吉 一	28. 3. 16
		松 本 多 賀 子	39. 6. 16
	文 部 事 務 官	斎 藤 靖 子	46. 4. 1
	事 務 補 佐 員	大 釜 一 也	37. 1. 16
	会 計 係	本 村 伝 一	34. 4. 1
		高 谷 た ま	39. 4. 1
	主 任	根 本 久 美 子	48. 3. 22
美 術 部	作 業 員	山 下 房 子	48. 7. 12
	事 務 補 佐 員	大 塚 正 司	44. 1. 6
	作 業 補 佐 員	岡 畏 三 郎	20. 5. 15
	部 長	上 野 了 幸	17. 11. 3
	主 任 研 究 官	関 千 代	18. 12. 15
	"	柳 沢 孝	21. 9. 30
	"	田 村 悦 子	22. 6. 16
	"	宮 次 男	30. 9. 1
	"	猪 川 和 子	22. 6. 27
	"	田 実 栄 子	23. 3. 31
	第 一 研 究 室	久 野 健	20. 5. 31
		関 口 正 之	42. 2. 1
		秋 山 光 和	42. 2. 1
	室 長		
	文 部 技 官		
	研 究 員 (非)		

Ⅶ 職 員

第二研究室	室	長	中 村 伝三郎	昭 22. 10. 1
	文 部 技 官		坂 本 満	33. 10. 1
	"		陰 里 鉄 郎	41. 4. 1
資 料 室	室	長	川 上 涇	21. 2. 28
	文 部 技 官		永 雄 ミ エ	23. 9. 3
	"		江 上 綏	38. 5. 1
	"		鶴 田 武 良	47. 12. 1
	"		河 野 元 昭	46. 10. 1
	専 門 職 員		橋 本 弘 次	21. 6. 15
	"		市 川 和 正	30. 7. 1
芸 術 部	文 部 技 官		野 久 保 昌 良	36. 10. 1
	部	長	浦 山 政 雄	27. 10. 1
	演 劇 研 究 室	室 長 事 務 取 扱	浦 山 政 雄	
音 樂 舞 踊 研 究 室	文 部 技 官		中 村 茂 子	39. 7. 1
	調 査 研 究 員 (非)		宮 本 瑞 夫	41. 5. 1
	室	長	横 道 萬 里 雄	28. 3. 16
	文 部 技 官		佐 藤 道 子	30. 5. 16
郷 土 芸 能 研 究 室	調 査 研 究 員 (非)		松 本 雍	44. 9. 1
	室	長	三 隅 治 雄	27. 10. 1
	調 査 研 究 員 (非)		仲 井 幸 二 郎	41. 5. 1
保 存 科 学 部	部	長	登 石 健 三	27. 10. 1
化 学 研 究 室	室	長	江 本 義 理	27. 4. 1
	文 部 技 官		門 倉 武 夫	32. 5. 1
	"		見 城 敏 子	29. 9. 1
物 理 研 究 室	室 長 事 務 取 扱		登 石 健 三	
	文 部 技 官		石 川 陸 郎	32. 4. 15
	"		三 浦 定 俊	48. 8. 1
生 物 研 究 室	室 長 事 務 取 扱		登 石 健 三	
	文 部 技 官		新 井 英 夫	45. 9. 1

修復技術部 第一修復技術室 第二修復技術室	調査研究員（非）		森 八 郎	昭48. 4. 1
	部	長	岩 崎 友 吉	27. 4. 1
	室	長	西 川 杏 太 郎	48. 7. 1
	文 部 技 官		中 里 寿 克	39. 1. 1
	専 門 職 員		茂 木 曙	29. 7. 1
	室	長	樋 口 清 治	37. 11. 1
	文 部 技 官		増 田 勝 彦	48. 8. 1

2 旧 職 員

(1) 昭和48年度

所 属	官職名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課	専 門 員	藤 江 金 治	昭 20. 8. ~ 48. 4. 1	退 職
	文部事務官	中 里 友 子	39. 7. ~ 48. 12. 31	"
	事務補佐員	早 川 ツル子	45. 4. ~ 48. 9. 30	"

(2) 昭和25年度～昭和47年度（25年8月～47年度末）

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間
庶務課（室）	所 長 事 務 代 理	矢 代 幸 雄	27. 4 ~ 28. 11
	所 長	田 中 一 松	27. 10 ~ 40. 3
	雇 用 員（事務）	山 田 秀 昭	25. 10 ~ 28. 4
	庁 務 補 助 員	長 沢 ア イ	27. 5 ~ 29. 5
	雑 用 員 仕	吉 野 茂 七	21. 11 ~ 29. 12
	"	諸 星 ハ ル	20. 5 ~ 29. 12
	臨 時 筆 生	藤 森 園 子	29. 6 ~ 31. 11
	庶 務 係 長	加 藤 輝 之	27. 10 ~ 34. 11
	"	安 岡 潤	34. 11 ~ 36. 10
	"		

Ⅶ 職 員

美術部	文部事務官	長 沢 朝 夫	29. 5 ~ 36. 11
	警務員	鶴 田 豊次郎	29. 4 ~ 38. 3
	庶務係長	鬼 山 光 義	36. 10 ~ 38. 4
	事務員	長 沢 道 子	31. 12 ~ 39. 7
	課長	小 島 忠 二	26. 5 ~ 40. 3
	作業員	糟 谷 愛 子	37. 2 ~ 40. 12
	事務員	中 村 圭 子	35. 11 ~ 40. 1
	警務員	鎌 田 幸四郎	29. 1 ~ 41. 2
	課長補佐	守 谷 安 知	38. 4 ~ 41. 6
	文部事務官	本 間 春 次	40. 4 ~ 42. 3
	課長	野 島 弥三郎	41. 4 ~ 44. 3
	事務補佐員	横 川 千代子	43. 4 ~ 44. 3
	課長	岩 田 守 夫	44. 4 ~ 45. 4
	技能補佐員	三 次 ヨ シ	45. 4 ~ 46. 3
	警務員	友 田 薫	41. 2 ~ 47. 3
	課長補佐	音 川 啓太郎	41. 6 ~ 47. 4
	事務補佐員	織 田 裕 子	45. 4 ~ 47. 8
	〃	高 橋 雄 二	43. 10 ~ 48. 3
	研究所文部技官	島 田 修二郎	23. 7 ~ 26. 11
	第一研究室文部技官	白 畑 よ し	5. 6 ~ 27. 8
	部長	松 本 栄 一	24. 8 ~ 27. 10
	第二研究室文部技官	河 北 倫 明	18. 1 ~ 27. 10
	第一研究室技術員	鈴 木 友 也	28. 1 ~ 28. 2
	資料室文部技官	持 丸 一 夫	22. 6 ~ 29. 3
	資料室技術員	山 田 桂 二	29. 2 ~ 30. 2
	第一研究室文部技官	大 串 純 夫	14. 4 ~ 30. 7
	第二研究室技術員	池 田 涼 子	22. 6 ~ 33. 6
	文部技官(併任)	新 規 矩 男	22. 10 ~ 34. 3
	部長	福 山 敏 男	23. 5 ~ 34. 4

芸 能 部	資 料 室 文 部 技 官	小 沢 健 志	26. 4 ~ 36. 3
	第 一 研 究 室 長	熊 谷 宣 夫	19.10 ~ 37. 3
	部 長	田 沢 坦	34. 6 ~ 37. 4
	第 一 研 究 室 長	伊 東 卓 治	22. 5 ~ 38. 3
	文 部 技 官 (併任)	米 沢 嘉 圃	27.10 ~ 40. 5
	〃	吉 川 逸 治	22.10 ~ 40. 5
	〃	河 北 倫 明	28. 4 ~ 40. 5
	第 一 研 究 室 長	隈 元 謙次郎	7. 6 ~ 41. 3
	第 二 研 究 室 長	秋 山 光 和	21.10 ~ 42. 2
	部 長	高 田 修	27.12 ~ 44. 3
	資 料 室 文 部 技 官	辻 惟 雄	37. 6 ~ 46. 5
	第 一 研 究 室 文 部 技 官	戸 田 禎 佑	37. 6 ~ 46. 6
	部 長	中 川 千 咲	9. 4 ~ 47. 3
	部 長 (併任)	加 藤 成 之	27.10 ~ 32. 6
	庁 務 補 助 員	新 井 範 子	27.10 ~ 34.10
	部 長 (併任)	下 総 覚 三	33. 1 ~ 37. 7
	演 劇 研 究 室 文 部 技 官	玉 木 清 子	34. 9 ~ 39. 6
	演 劇 研 究 室 研 究 員 (非)	戸 部 銀 作	27.10 ~ 41. 3
	音 楽 舞 踊 研 究 室 研 究 員 (非)	岸 辺 成 雄	27.10 ~ 41. 3
	郷 土 芸 能 研 究 室 研 究 員 (非)	池 田 弥 三 郎	27.10 ~ 41. 3
	演 劇 研 究 室 研 究 員 (非)	石 田 百 合 子	40. 4 ~ 41. 3
	〃	阿 部 順 子	40. 8 ~ 43. 9
	音 楽 舞 踊 研 究 室 研 究 員 (非)	山 路 興 造	42. 4 ~ 44. 3
保 存 科 学 部	臨 時 筆 生	赤 岡 恒 子	26. 4 ~ 29. 7
	庁 務 補 助 員	橋 本 義 雄	28.10 ~ 32. 7
	修 理 技 術 研 究 室 長	毛 利 登	37.10 ~ 38. 4
	物 理 研 究 室 研 究 員 (非)	呉 屋 充 庸	29. 4 ~ 40. 3
	修 理 技 術 研 究 室 長	立 田 三 朗	37.10 ~ 45. 1

注 (1)(2) の所属, 官職は, 転退職時を示す。

VIII 関 係 法 規

◎文部省設置法（昭和24年法律第146号
最終改正 昭和48年9月29日103号）（抄）

第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条〔審議会〕に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

- 2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

- 3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
- 4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

◎文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日文部省令第2号
最終改正 昭和48年9月29日第25号）（抄）

第5章 文化庁の附属機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 東京国立文化財研究所

(所 長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の4部を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部
- 四 修復技術部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の3室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室、第二研究室及び資料室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。
- 4 資料室においては、美術の研究に関する資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究を行なう。

Ⅷ 関 係 法 規

(芸能部の3室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室を置く。

2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(保存科学部の3室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室、及び生物研究室を置く。

2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室を置く。

2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

◎文部省定員細則(昭和44年5月21日文部省訓令第12号)(抄)
(改正 昭和48年9月29日第28号)

文部省定員規則(昭和44年文部省令第12号)第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

文部省定員細則

1 文部省に係る行政機関職員定員令(昭和44年政令第121号)第1条に規定する定

員（以下「定員令第1条定員」という。）及び沖縄の復帰に伴う行政機関の職員の定員に関する法律の適用の特別措置に関する政令（昭和47年政令第191号）第1条に規定する定員（以下「特措法政令定員」という。）別の本省の各内部部局、各国立学校、各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は、次の表のとおりとする。

文化庁

区 分		定員令第1条定員	特措法政令定員	計
附属機関	国立文化財研究所	132人 各国立文化財研究所を通じての定員とする。		132人

- 2 各国立大学、各国立高等専門学校、各国立高等学校、各国立青年の家、各国立博物館、各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の定員は、国立学校及び本省の附属機関にあっては文部大臣、文化庁の附属機関にあっては文化庁長官が、それぞれ、前項に定める当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において、別に定める。

附 則 （昭和48年9月29日文部省訓令第28号）

- 1 この訓令は、公布の日から施行する。

◎国立博物館等の機関別の定員について（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）（抄）
（昭和48年4月12日改正）

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき、各国立博物館、各国立近代美術館および各国立文化財研究所の機関別の定員を次のとおり定める。

機 関	定 員
東京国立文化財研究所	48人

附 則

この裁定は、昭和48年4月1日から適用する。

◎教育公務員特例法施行令（昭和24年 1月12日 政令第6号
最終改正 昭和47年 5月4日第163号）（抄）

（教育公務員以外の者）

第2条 省略

第3条 省略

第3条の2 文部省設置法（昭和24年法律 第146号）第14条〔国立の学校等〕及び第36条第1項〔附属機関〕に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第3章の2〔高エネルギー物理学研究所及び国文学研究資料館〕に規定する機関の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条〔採用及び昇任の方法〕、第7条〔休職の期間〕、第11条〔服務〕、第12条〔勤務成績の評定〕、第19条〔研修〕、第20条〔研修の機会〕及び第21条〔兼職及び他の事業等の従事〕国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

- 一 法第4条第1項〔採用及び昇任の選考〕については、国立学校設置法第3章の2に規定する機関の長及びその職員にあっては「文部省令で定めるところにより任命権者」、その他の機関の長及びその職員にあっては「任命権者」
- 二 法第4条第2項〔採用及び昇任の選考の基準〕、第7条、第11条及び第12条については、「任命権者」

◎東京国立文化財研究所部室長会議運営規則

（昭和45年 1月23日所長裁定）

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営については、この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は、本研究所の重要事項について協議し、各部課相互の連絡は

かることを目的とする。

第3条 部室長会議は、次の各号にかかせる職員をもって組織する。

- 一 所 長
- 二 各部長
- 三 各室長
- 四 課 長

第4条 部室長会議は所長が招集し、その議長となる。

2 所長に事故あるときは、会議出席者の中から互選により議長を定める。

3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は、随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他、会議の運営に関して必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、昭和45年1月23日から施行する。

◎東京国立文化財研究所受託研究取扱規程

(昭和46年3月15日所長裁定)
(昭和47年10月2日改正)

(趣 旨)

第1条 この規程は、東京国立文化財研究所（以下「研究所」という。）における受託研究（外部からの委託を受けて公務として行なう研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意義であり、かつ本来の調査研究に支障がなく、当該年度の予算額の範囲内において行なうものとする。

(受託の条件)

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託研究は、受託者が一方的に中止することはできないこと。
- (2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使

Ⅷ 関 係 法 規

用させ、または譲与することはできないこと。

(3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。

(4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を委託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となった経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。

(5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。

2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。

3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号および第5号の条件は、これを付さないことができる。

4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行なうことができる。

(決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室および部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

(受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所長に提出しなければならない。

2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者および研究所契約担当職員に通知するものとする。

3 前項の通知に基づき契約担当職員は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

(研究の中止等)

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めたときは、ただちに所属の室および部の長を経て所長に報告し、その指示を受けるものとする。

2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めたときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者および契約担当職員に通知するものとする。

(研究結果の報告等)

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の室および部の長を経て所長に報告するものとする。

2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行なうものとする。

3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行なうものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

この裁定は、昭和47年10月2日から施行する。

[別紙様式]

受 託 研 究 申 込 書

昭和 年 月 日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名 (名称・代表者)

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規定により、下記のとおり受託研究の申し込みをします。

記

1. 研究題目
2. 研究目的および内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材、器具等の提供
5. その他

昭和49年8月20日 印刷
昭和49年8月28日 発行

非売品

発行者 東京国立文化財研究所

代表者 関 野 克

東京都台東区上野公園13-27

東京国立文化財研究所要覧

<正 誤 表>

頁	行	誤	正
15	下から 5 行目	庶 務 室	庶 務 課
30	下から 4 行目	ミューゼアム 268 268
35	上から 2 行目	民謡歌誌集成	民謡歌詞集成
42	上から 12 行目	・城敏子	見城敏子
56	下から 6 行目	押出伝を	押出伝を